

高岡市埋蔵文化財調査報告第21冊

越中国府関連遺跡調査報告

—古府(3)地区総合流域防災(急傾)事業に伴う平成21年度の調査—

2010年2月

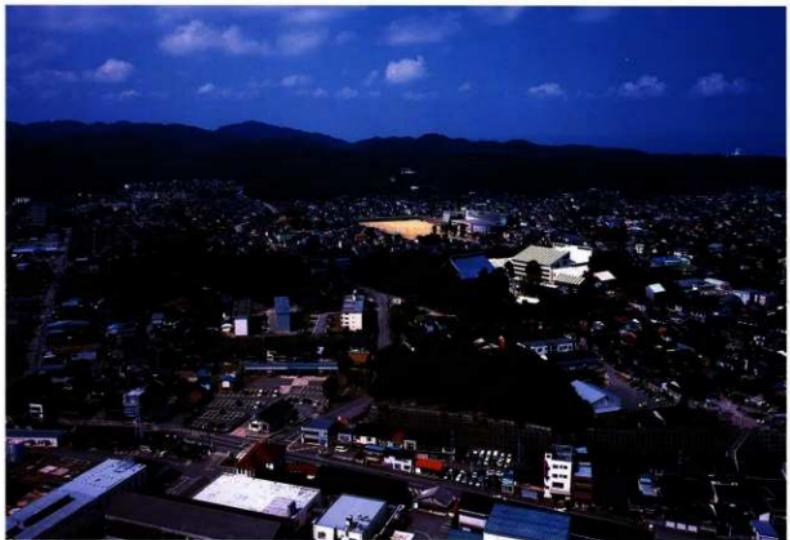
高岡市教育委員会

越中国府関連遺跡調査報告

—古府(3)地区総合流域防災(急傾)事業に伴う平成21年度の調査—

2010年2月

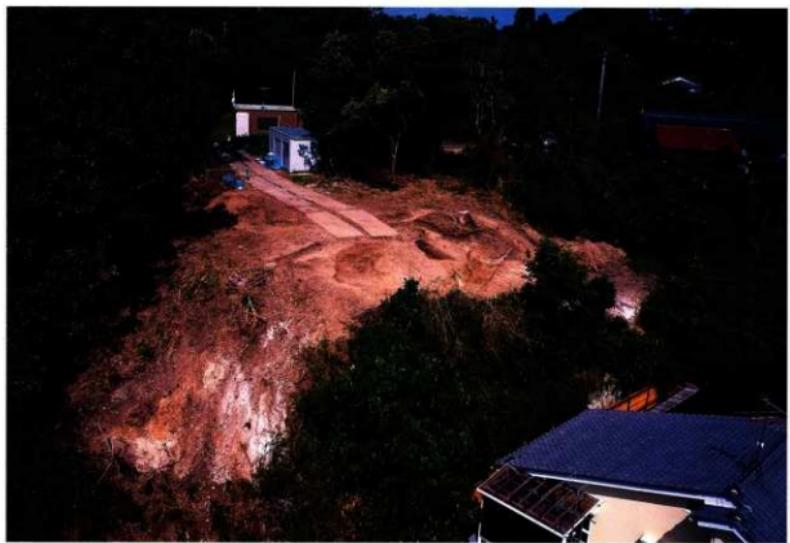
高岡市教育委員会



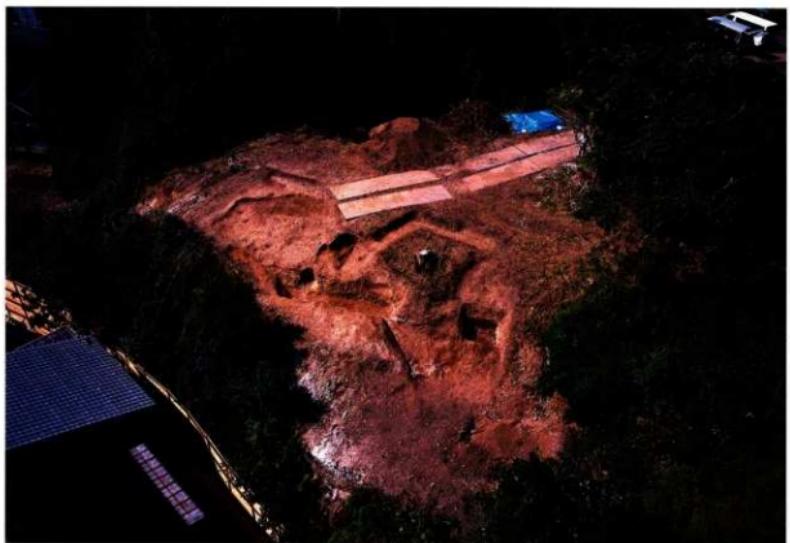
1. 遠景（東）



2. 遠景（南）



1. 全景（南東）



2. 全景（北東）



1. 土壘 S A01、堀址 S D01全景（南）



2. 堀址 S D01土層（北）

序

『万葉集』を編集した大伴家持が、越中に国守として赴任したのは奈良時代の中頃のことです。

その赴任先である越中国府は、文献史学のほか、長年にわたる発掘調査の成果などにより、高岡市の伏木台地に所在したものと考えられています。

時代は変わり、天正12年（1584）に伏木台地には勝興寺が建立され、今日に至ります。

しかしながら、それ以前の詳細については歴史資料が希少なため、詳細は把握されておりません。わずかに、江戸時代の文献に城郭の存在を伝えるものがあり、これでもって「古国府城」と呼ばれております。

このたび、勝興寺の南方の急傾斜地で崩壊対策防止等の工事が実施されることになり、事前に発掘調査を実施いたしました。

その結果、古国府城のほか、越中国府関連遺跡の遺構や遺物が検出されました。

本書はこれらの成果を収めたものです。郷土における歴史探求や学術研究に、ご活用いただければ幸いです。

末尾になりましたが、発掘調査の実施にご協力いただきました関係各位、地元の皆様に、厚くお礼申し上げます。

平成22年2月

高岡市教育委員会
教育長 水見 哲正

例　　言

1. 本書は、古府(3)地区総合流域防災(急傾)事業に伴う、越中国府閔連遺跡（御亭角遺跡）の発掘調査の報告書である。
2. 当調査は、富山県高岡土木センターの委託を受けて、高岡市教育委員会が実施した。
3. 調査実務は、高岡市教育委員会の監理で、株式会社エイ・テックが実施した。
4. 発掘調査（現地調査）は、平成21年9月14日～同年9月30日までである。
5. 調査関係者は次の通りである。

〔高岡市教育委員会〕

文化財課長：大巻玄治

〔埋蔵文化財担当〕

統括専門員：大村友則

副主幹：山口辰一、主任：横津明義、主任：栗山雅夫

〔株式会社エイ・テック〕

代表取締役社長：谷川猛

調査員：岡山一広、後藤浩之、矢島博文、吉田有里

6. 当調査の監理は山口が担当し、現地調査・資料整理・報告書編集は岡出が担当した。

7. 本書における遺構記号は、次の通りである。

SΛ-土器、SD-溝（堀跡）

8. 本書における遺物番号は、次の通りである。

101～108：土器類、201～204：古代瓦、301～303：石製品、401：銅製品、501：鉄滓
601～633：近代瓦

9. 現地調査及び報告書作成において、以下の各氏より御教示・御支援を得た。

榎本正春、谷口信高、西井龍儀

（順不同、敬称略）

10. 本書の執筆担当は以下のとおりである。

第1章-1～3：山口

第1章-4、第2～4章：岡出

第5章：山口

目 次

巻首図版

序

例 言

目 次

第1章 序 説	1
1. 遺跡概観	1
2. 勝興寺周辺の歴史的環境	4
3. 勝興寺周辺の調査研究	6
4. 調査経過	7
5. 調査概要	9
第2章 遺 構	11
1. 土 墓	11
2. 堀 壇	11
3. 溝	11
第3章 遺 物	12
1. 土器類	12
2. その他の遺物	12
第4章 結 語	13
第5章 付載－近代瓦	15

図面目次

- 図面01 遺構実測図 1. 遺構全体図 (1/400)
2. 遺構平面図 (1/200)
- 図面02 遺構実測図 土壙 S A01、堀址 S D01、溝 S D02・03実測図 (1/80)
- 図面03 遺構実測図 土壙 S A01、堀址 S D01、溝 S D02土層図 (1/40)
- 図面04 遺物実測図 土器類 古代瓦 (1/3・1/4)
- 図面05 遺物実測図 古代瓦、石製品、銅製品、鐵滓 (寛大・1/2・1/4)
- 図面06 遺物実測図 併棧瓦・平瓦・埴 (1/3・1/6)
- 図面07 遺物実測図 栓瓦 (1/6)
- 図面08 遺物実測図 栓瓦 (1/6)
- 図面09 遺物実測図 栓瓦 (1/6)
- 図面10 遺物実測図 栓瓦 (1/6)
- 図面11 遺物実測図 栓瓦 (1/6)
- 図面12 遺物実測図 栓瓦 (1/6)
- 図面13 遺物実測図 栓瓦 (駒形雪止瓦) (1/6)
- 図面14 遺物実測図 窯道具 (1/2・1/3)

図版目次

- 図版01 遺構写真 1. 調査地区遠景 (南)
2. 調査地区全景 (南東)
- 図版02 遺構写真 1. 調査地区全景 (東)
2. 調査地区全景 (上方)
- 図版03 遺構写真 1. 土壙 S A01・堀址 S D01全景 (北西)
2. 土壙 S A01・堀址 S D01全景 (南)
- 図版04 遺構写真 1. 土壙 S A01土層 (南)
2. 堀址 S D01土層 (南)
- 図版05 遺構写真 1. 溝 S D02全景 (北東)
2. 溝 S D02全景 (北東)
- 図版06 遺構写真 1. 矢田上町 (1) 地区急傾斜地 瓦出土状態 (西)
2. 矢田上町 (1) 地区急傾斜地 瓦出土状態 (西)
3. 矢田上町 (1) 地区急傾斜地 塹出土状態 (北西)
- 図版07 遺物写真 1. 土器類
2. 古代瓦

図版08 遺物写真 1. 古代瓦
2. 石製品
3. 銅製品、鉄滓

図版09 遺物写真 近代瓦

図版10 遺物写真 近代瓦

図版11 遺物写真 近代瓦

図版12 遺物写真 近代瓦

図版13 遺物写真 近代瓦

図版14 遺物写真 近代瓦

図版15 遺物写真 近代瓦

図版16 遺物写真 近代瓦

挿 図 目 次

第1図 越中国府関連遺跡位置図 (1/5万)	1
第2図 越中国府関連遺跡発掘調査地区一覧 (1/1万)	2
第3図 慶興寺周辺の調査地区 (1/3,000)	5
第4図 伏木の急傾斜地工事地区位置図 (1/2万5千)	7
第5図 久田上町(1)地区急傾斜地の調査	7
第6図 久田上町(1)地区急傾斜地工事位置図 (1/5,000)	8
第7図 古府(3)地区総合流域防災(急傾)工事位置図 (1/5,000)	8
第8図 古府(3)地区総合流域防災(急傾)補強工範囲の調査	8
第9図 古府(3)急傾地区位置図 (1/500)	9
第10図 古府(3)急傾地区的調査	10
第11図 古国府域関連遺構配置図 (1/2,500)	14
第12図 棟瓦概念図	16

挿 表 目 次

第1表 越中国府関連遺跡発掘調査地区一覧表	3
第2表 越中国府関連遺跡矢山上町急傾斜地法棒工地区 近代棟瓦計測表	16

調査参加者名簿・高岡市教育委員会

整 理 安藤誠吾、小島智子、小林央、菅谷万須美、竹部光希、野雅貴

調査参加者名簿・株式会社エイ・テック

発 掘 水田修、平野重則、二日成治

整 理 上田恵子、坂山智恵、志賀寺愛、前馬みゆき、三島幸代、南真弓、渡邊悦子

第1章 序 説

1. 遺跡概観

伏木台地の遺跡

越中国府関連遺跡は、高岡市街地の北側、富山湾へと注ぐ小矢部川の河口左岸の伏木台地に位置している。伏木台地は標高274mの二上山の東側に拡がる台地で、上位と下位の2つの段丘から構成されている。この台地全体が遺跡地帯（埋蔵文化財包蔵地）と判断している。

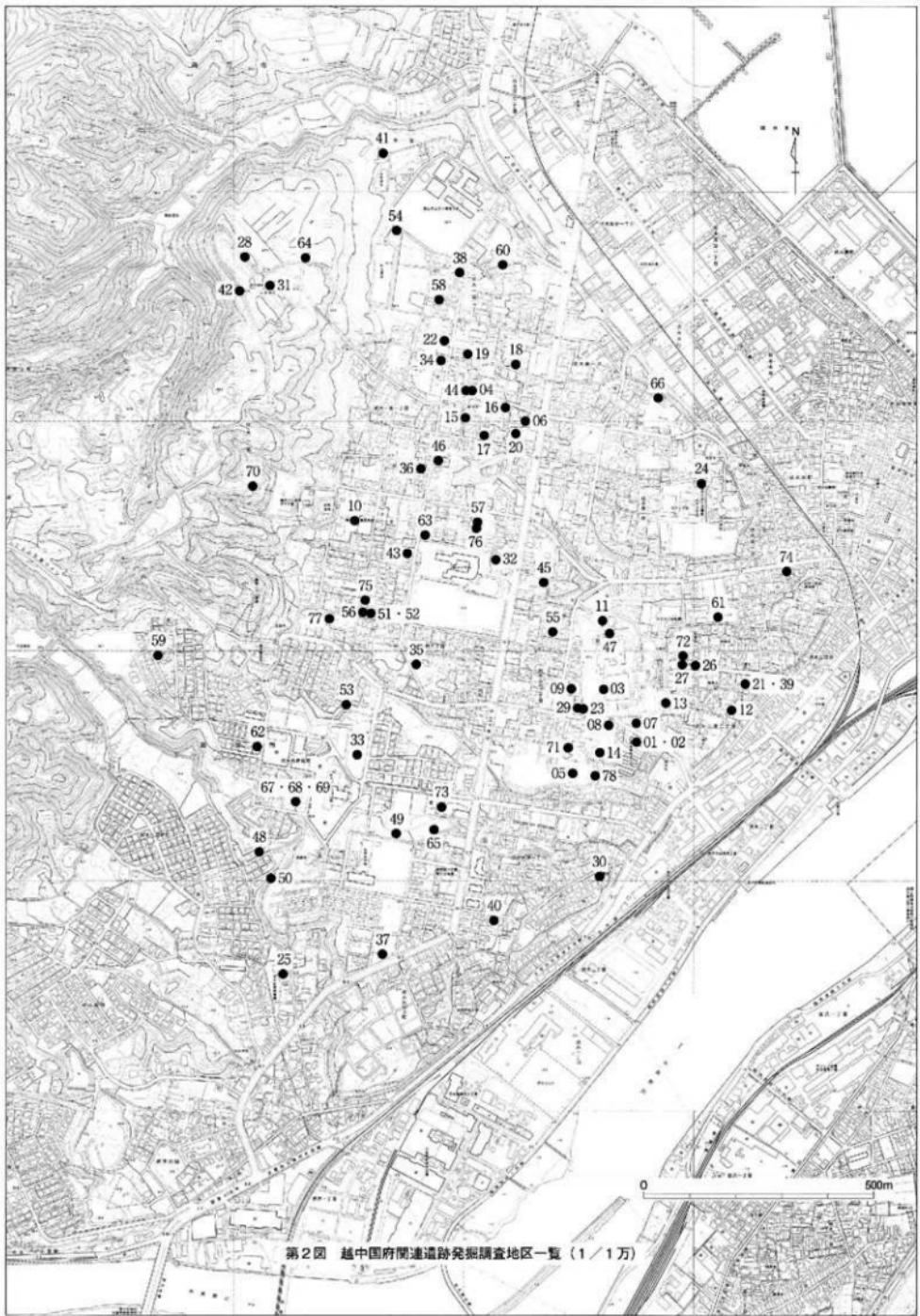
この越中国府関連遺跡と称している遺跡は、越中国府跡推定地、県指定史跡越中国分寺跡、越中国分尼寺跡想定地を中心とし、これに関連する施設や集落遺跡を含むものである。また国府以前の古墳群や寺院跡、以後の城郭跡等も当地内に所在している。

既往の調査

戦前におけるものとしては、昭和11年の堀井三友氏による越中国分寺跡の発掘調査が唯一のものである。その後30年間伏木台地における発掘調査は実施されずにきたが、古墳の発見や各時代の遺物の出土、富山考古学会による巡見、古岡英明氏による基礎資料の収集や研究論文の発表等があり発掘調査の必要性が強調されてきたところであった。そして、昭和41年に至り、富山県教育委員会・富山考古学会会員による調査団が結成され、国分寺跡と国府跡とに対して、発掘調査が実施されることになった。国分寺跡の調査は、その中心と目されていた境内地におけるものである。国府跡の調査は、国府跡推定地の南側一帯、御亭角・美野下地区（御亭角遺跡）におけるものである。ここから白鳳時代の瓦が出土することにより、廢寺跡（御亭角廢寺）とされ、國府・國府との関連も指摘されてきた地区であった。



第1図
越中国府関連遺跡
位置図（1／5万）



第2図 越中国府関連遺跡発掘調査地区一覧 (1/1万)

No.	地 区	所 在 地	年 度	No.	地 区	所 在 地	年 度
01	古府宿舎1	伏木古府2丁目67番地	S60	41	井	伏木一宮第2区375番	H14
02	古府宿舎2	伏木古府2丁目67番地	S60	42	あるさと林道	伏木一宮1-1外	H14
03	勝興寺木造裏	伏木古府17番	S60	43	奥村1	伏木一宮1丁目161-1	H14
04	国分寺北接	伏木一宮2丁目3番	S61	44	奥村2	伏木一宮2丁目543	H14
05	御茶角・小谷	伏木古府2丁目3番	S61	45	添	伏木東一宮757	H15
06	四谷守北側	伏木一宮1丁目1番	S62	46	庵内・だらま塩	伏木1丁目618-2	H15
07	勝興寺南接	伏木古府2丁目1番	S62	47	勝興寺裏裏	伏木古府716番	H15
08	勝興寺南側1	伏木古府2丁目3番	S62	48	矢田新町急傾斜地	矢田新町地区	H15
09	勝興寺南側2	伏木古府2丁目7番	S62	49	ロクショウ	伏木古府元町430-1外	H16
10	万葉歴史館	伏木一宮1丁目14番外	S62	50	矢田新町3急傾斜地	伏木矢田新町北内	H16
11	勝興寺北接	伏木古府17番	S63	51	西村1	伏木古府3丁目79-1外	H16
12	妙法寺	伏木古府12番	S63	52	西村2	伏木古府3丁目79-1外	H16
13	矢田安太郎	伏木古府3番	S63	53	澤	伏木古府3丁目495番	H16
14	勝興寺南側2	伏木古府2丁目3番	S63	54	伏高NTT	伏木一宮字幕2区357番	H16
15	坂口幸夫	伏木一宮1丁目601	H01	55	オダケホーム	伏木古府2丁目23-3外	H16
16	松谷二郎	伏木一宮1丁目581-1	H01	56	マルワ住建	伏木古府3丁目81-1	H16
17	立野二郎	伏木一宮1丁目582外	H01	57	竹内	伏木一宮1丁目697-3外	H16
18	藤田吉代治	伏木一宮2丁目434-1外	H01	58	高川	伏木東一宮2丁目311	H16
19	内一次	伏木一宮2丁目526	H01	59	豪谷	伏木古府元町315番68外	H17
20	海員会館	伏木一宮1丁目577	H01	60	ア・ライズ伏木	伏木一宮2丁目413-1外	H17
21	伏木副鉄所	伏木古府12-5	H02	61	シマダ木材	伏木古府221外	H17
22	芹沢貢	伏木一宮2丁目259	H02	62	故地	伏木古府元町487番22	H17
23	下水道古府半蔵	伏木古府2丁目7番	H03	63	中出	伏木一宮1丁目677番1	H17
24	伏木泥窓館	伏木東一宮17番3	H03	64	森の祭典	伏木一宮大平2-1外	H18
25	古府保育園	伏木古府17番1号	H04	65	ロクショウ2	伏木古府元町430-6	H18
26	伏木古府5号棟1	伏木古府11番	H05	66	佐野	伏木東一宮20-26	H18
27	伏木古府5号棟2	伏木古府15番	H07	67	オダケホーム古府元町1	伏木古府元町478-1	H18
28	白山林道	伏木一宮大坪2-1	H08	68	オダケホーム古府元町2	伏木古府元町478-1	H18
29	林	伏木古府2丁目H220	H08	69	オダケホーム2	伏木古府元町478-1	H18
30	嘉延改修	伏木古府1-149	H09	70	伏木配水池	-宮崎古塚14-2	H18
31	気多神社	伏木一宮2063	H09	71	柴芳舟・能松	伏木古府2-207	H19
32	伏木中学校集会所	伏木古府3丁目1番	H10	72	麻生	伏木古府15番2	H19
33	日本薬化学会(白山経塚)	伏木古府元町476	H11	73	ハママヤ製糸	伏木古府元町430-5	H19
34	山	伏木古府2丁目4番8号	H12	74	魚川	伏木一宮1201番	H20
35	堀	伏木一宮3丁目373	H12	75	鳥1	伏木古府3丁目82-1	H20
36	寺崎	伏木一宮1丁目212-1	H12	76	鳥2	伏木一宮1丁目696	H21
37	古府公民館	矢田上町201番2	H12	77	若城	伏木古府3-19-3外	H21
38	林	伏木矢田一宮2丁目332番地	H12	78	古府3急傾斜面上	伏木古府172-1	H21
39	気象観測施設	伏木古府12-5	H13				
40	大村	矢田上町181	H13				

第1表 越中国府関連遺跡発掘調査地区一覧表（昭和60年以降）

この昭和41年の調査成果を発展させる形での発掘調査は実施されず、約20年の歳月が流れることになった。昭和57・58年に実施された小杉町丸山遺跡の発掘調査によって、御亭角遺跡出土の瓦の生産地の一つが、この遺跡であることが判明し、伏木台地の遺跡の問題が再び注目されることとなった。昭和60年に、御亭角遺跡の東側、米野下地区において、大蔵省北陸財務局の宿舎建設により、多量の遺物が出土し、緊急に発掘調査が実施された。「古府宿舎地区」の調査である。

一方、高岡市教育委員会は、越中國府関連遺跡における計画的な発掘調査を昭和61年度から5箇年により実施した。その後、開発工事に対応する形で、試掘調査を中心としたものが実施されてきている。昭和60年より平成21年までの発掘調査については、第2回と第1表で示した。

2. 勝興寺周辺の歴史的環境

御亭角（おちんかど）

浄土真宗本願寺派の大寺院「勝興寺」の南西側一帯は、「御亭角（おちんかど）」と呼ばれてきたところである。白鳳時代（7世紀後半頃）の瓦が出土することから、古代の寺院跡の所在地とされ、御亭角遺跡、ないし御亭角廃寺とされている。しばらく後に越中國（律令時代の国）と行政区分される地区では、最古の寺院とされているものである。この寺院の性格として、國府付属寺院や地方豪族の氏寺とされている。

伏木台地には、奈良時代後半に国分寺が造営されたこともあり、奈良時代後半頃の瓦当上は多いが、白鳳時代の瓦出土地はここが唯一である。また奈良時代後半頃の瓦も出土することから、寺院が継続して営まれた可能性も高い。この御亭角廃寺が当初、国分寺の機能を代替していたとの考えも出ている。

越中國は、勝興寺境内にあったと推定されている。国府の整備は奈良時代前半とされている。国府存続期においても、周辺である当地は、重要な地区と見える。

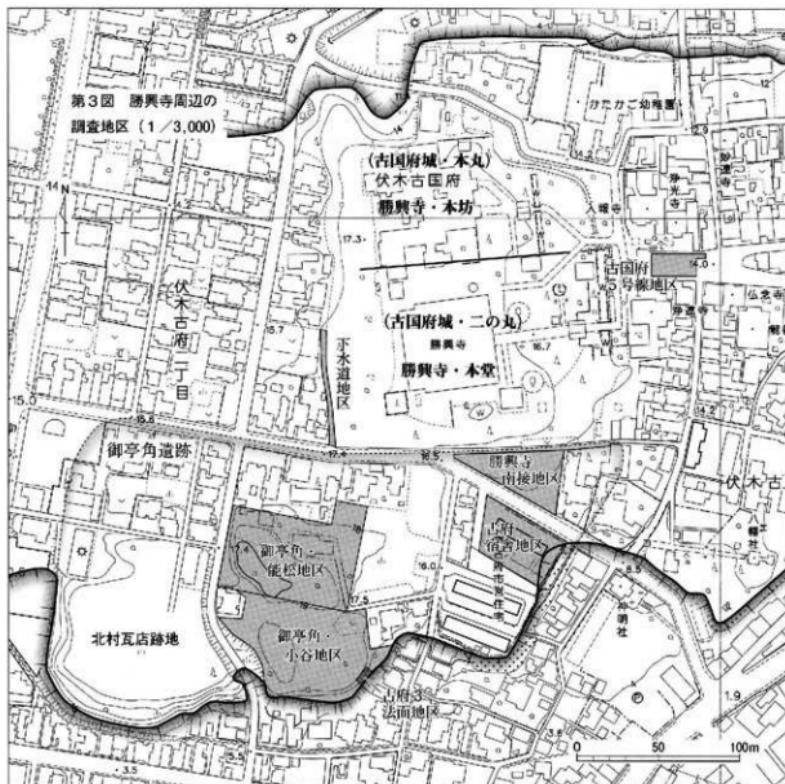
戦国時代の越中

戦国時代でも末に近い頃、1570・80年代、織田信長、それを継いだ豊臣秀吉の全国統一が進む中、越中にいても各勢力による多くの攻防（興亡）があった。越後勢の上杉謙信による越中征服、謙信の急死、織田勢の越中進出、本能寺の変、佐々成政の越中平定、秀吉と成政の反目、能登木森城の戦い、前田氏の越中支配とめまぐるしく情勢が変わる。

「勝興寺」は旧福光町上山の「上山御坊」に始まり、ここより北西の高木場へ移った。永正14年（1517）に「勝興寺」の寺号を得ている。その後焼失により安養寺村（小矢部市末友）で再建された。勝興寺の現在地、伏木古国府での建立は天文12年（1543）である。当時越中を支配していた佐々成政（居城=富山城）の通知と神保氏張（居城=守山城）の制札による。前者には、「守山麓」後者には「府の分一門」とあり、伏木台地一帯と理解される。天文13年（1545）、豊臣秀吉の禁制があり、「古国府」の名が出てくる。

戦国時代の城

旧新湊市の放生津には、鎌倉時代に守護所が置かれ、室町時代には守護代神保氏の拠点として、放生津城が営まれた。二上山にある守山城は南北朝時代に築城され、室町時代には、この神保氏が據るところとなつた。この守山城は放生津城の詰城として位置付けられている。さらに東麓の伏木台地に出城として「古国府城」が築かれた。勝興寺は土塁で取り囲まれており、付近には土塁や空堀が多く存在している。周囲の単郭砦や館の跡は、10箇所を数える。これらの遺構を「古国府城」のものとするのが有力な見解である。「古国府城」の名は、当時（戦国時代頃）の文献資料ではなく、江戸時代になって富田景周（1746～1828）の『越後賀三州志』に収録している「古墟考」にみえるものである。



勝興寺・御亭角と古国府城

伏木台地は大きく西側の上位段丘と東側の下段丘に区分され、下位段丘は侵食谷が大きく2条入ることにより、北・中央・南の3つの台地に細分される。勝興寺は中央台地に位置し、この台地は北側の伏木侵食谷（赤坂谷）と南側の串岡侵食谷（古府谷）に挟まれ、東側は小矢部川の低地に臨み、西側は高位段丘さらに二上山へと続く。勝興寺の南西側が御亭角と呼ばれている所で、西側は谷部となる。

現在、戦国時代の城郭としての古国府城（ないし勝興寺城）としているものは、厳密に定義されていなく、やや漠然としている。これまでにこの城跡について成文化されていないものも含めて、以下の考えがあると理解される。

- ①御亭角地区（宇御亭角）の小道を挟んだ西側の北村瓦店跡地を、当城の中心部（本丸）とし、御亭角地区をこれとの関連（二の丸的なもの）地区とするもの。なお、北村瓦店跡地が、南側の谷部へ一番突出した所である。
- ②現在の勝興寺境内を中心とするもので、範囲をやや狭く考えるもの。
- ③御亭角地区・勝興寺境内、及び周辺地区を城地とし、範囲を広く捉えるもの。なお、これについては、

中心部（本丸）を勝興寺境内とするものと、これ以外とするものに分けることができる。

御亭角地区にも土塁がある。「御亭角城郭遺構」である。絵図には、「後館」や「宇賀藤益助館」と記されている。南側は崖に臨む地形である。北・東・西側の3方に土塁が存在したことは、現在の遺存状況から確実である。南側は崩壊したとされている。

3. 勝興寺周辺の調査研究

発掘調査の展開

勝興寺周辺の発掘調査は、主に白鳳時代の寺院跡・御亭角遺跡（御亭角廃寺）や奈良・平安時代の越中国跡を主な対象として、昭和60年度以来幾つか実施してきた。これらの調査では、白鳳時代から平安時代に至る遺構・遺物が多く検出・出土したが、次に多くみられたのが、戦国時代、特に16世紀代中頃の遺構・遺物である。この戦国時代の遺物について、勝興寺が当社において建立される以前の資料と捉え、当地にあったとされる古国府城にかかわるものと認識するに至った。

小川跡関連では、昭和62年度調査の「勝興寺南接地区」や平成3年度調査の勝興寺南西側の「下水道古府半岡枝線地区」等勝興寺周辺地区において、大型掘立柱建物址等官衙跡を推定させる遺構が検出された。

城郭関連では、昭和61年度調査の「御亭角・小谷地区」の調査では、台地の南側縁近くで戦国時代の東西の溝跡や、東側より南北の堀跡が検出された。平成8年度の勝興寺門前の「古府5号線マイロード地区」からは、戦国時代の土器溜りが検出された。なお、「御亭角・小谷地区」はこれまで「御亭角地区」と称してきたが、他の御亭角地区と区別するためこのように称することにした。

守山麓

平成19年（2007）2月、吉岡英明氏は「守山麓－古国府城考－」と題する論考を『二上山研究』第4号に発表された。古国府城に関する初めての本格的論文である。「古墟考」の記述「古国府、在二上庄、古国府と書くは地名也。古府と書くは邑名也。旧莊に平城也。本丸ニ五十間口八十二間、二丸七十三間口百間。今の勝興寺の地也。溝塗猶在す。左右は谷、背後は山に接す。前頭は稍下のこと四・五町にして古府村に到る。城跡は山下の台也。嵐山より乾方五里と云々」を分析され、さらに各資料の検討を加え、古府城の本丸を勝興寺本坊付近に、二の丸を本堂付近に、すなわち上屋で囲まれた勝興寺境内に城郭の中核部分を設定し、さらに周囲に大きく広がる城郭とされた。

能松地区的調査

平成19年（2007）6月～9月に、宅地造成に伴い御亭角遺跡「能松地区」の試掘調査を実施した。当地区は大きな土塁が東西に2箇所存在する地区として認識されてきた所である。白鳳～平安時代に関しては、寺院跡を示すような明確な遺構は検出されなかったが、古代瓦が多く出土したことによって、これまでの知見がさらに進展し、さらに奈良時代後半頃の越中国分寺期瓦のなかに、文字瓦・刻書「寺」の瓦が出土したこともあり、白鳳時代の御亭角廃寺が奈良時代以降も当地にあって寺院として機能していたであろうとの見解が導き出された。中世城郭関連では、16世紀代の土器が多量に出土した。これらは第3四半期を中心とするも、勝興寺の建立の天文12年（1584）以前に位置付け得るものである。東西の土塁については、北側土塁としてきたものが、南側土界に取り付く腰曲輪であることが判明した。これによって、堀（濠）を挟んで土塁が平行するものでないことになり、長さにわたる縫を解くことが判明した。また当地が単郭曲輪として南側が崖（谷）となり、北・東・西に土塁が四面するとしてきたことについても、複雑な構造をもつ形態であることも判明してきた。

4. 調査経過

二上山周辺

高岡市の北東側、西山丘陵の東側に二上丘陵・二上山がある。二上山は西側の西山丘陵と海老坂断層により分かれ山塊をなしている。二上山は数々の峰からなり、主峰（東峰、奥の御前274m）、西峰（城山259m）があり、北側には大師ヶ岳（254m）や小竹山（摩頂山251m）、東側には鉢伏山（211m）がある。南側から東側には小矢部川が流れ、北側は富山湾へ臨んでいる。二上山の東麓は伏木台地であり、越中国守跡推定地を中心とする越中国府間遺跡の所在地である。南麓は多くの古墳群・横穴墓群の所在地である。

二上山の東・南麓は遺跡の所在地であると共に、多くの急傾斜地の指定地でもあり、急傾斜地崩壊対策防止事業が実施されている所である。高岡市教育委員会と工事主体の富山県高岡土木センターと工事實施にあたり、事前協議を行ない、試掘調査や工事立ち会いの方法で埋蔵文化財の保護を実施しているところである。

矢田上町（1）地区急傾斜地の調査

伏木台地・南台地の南西端部で法杖や埴輪等の設置工事が実施されることになった。平成21年5月21日に北側の法杖工範囲の立ち会いを実施し、平成21年5月26日に中央・南側の埴輪工範囲の立ち会いを行った。古代～近世の遺構・遺物は確認されなかつたが、北側において近代瓦が出土したので、良好な遺物のみ採取し、今回報告することにした。



第4図 伏木の急傾斜地工事地区位置図（1/2万5千）

ア：矢田上町（1）地区急傾斜地工事地区

イ：吉府（3）地区総合流域防災（急傾）工事地区



第5図 矢田上町(1)地区急傾斜地の調査 左: 法耕工範囲の状況(南西)、右: 摺壁工範囲の状況(西)

御亭角地区の工事

伏木台地・中央台地の南端部で工事が計画された。古府（3）地区総合流域防災（急傾）工事で、御亭角遺跡の南東及び南側である。平成20年5月、高岡市教育委員会と高岡土木センターとで現地の確認と協議を行った。当地の斜面地での造跡立地の可能性が低いと判断し、工事立ち会いとすることにした。

古府（3）法面工範囲の調査

古府（3）地区総合流域防災（急傾）法面工工事で、台地の東側地区である。平成21年8月31日に工事立ち会いを実施したところ、斜面の上方の平場部分で造構が検出され遺物が出土した。このため本発掘調査を実施することになり、高岡市教育委員会監理で、株式会社エイ・テックが発掘調査を実施した。本書がこの調査報告である。

古府（3）擁壁工範囲の調査

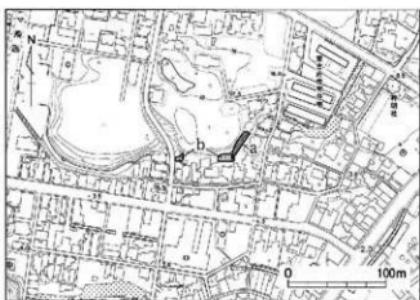
古府（3）地区総合流域防災（急傾）擁壁工工事で、台地の南側地区である。第Ⅰ期として西側部分を平成21年11月2日～5日に工事立ち会いを実施した。第Ⅱ期として平成22年1月13日に工事立ち会いを実施した。第Ⅰ期では、造構は確認されなかつたが、古代の遺物、土器・須恵器・瓦が出土した。第Ⅱ期では、造構・遺物は確認されなかつた。



第6図 矢田上町（1）地区

急傾斜地工事位置図（1／5,000）

a：法面工範囲、b：擁壁工範囲



第7図 古府（3）地区

総合流域防災（急傾）工事位置図（1／5,000）

a：法面工地区、b：擁壁工地区



第8図 古府（3）地区総合流域防災（急傾）擁壁工範囲の調査

左：第Ⅰ期の状況（南西）、右：第Ⅱ期の状況（南東）

5. 調査概要

調査に至る経緯

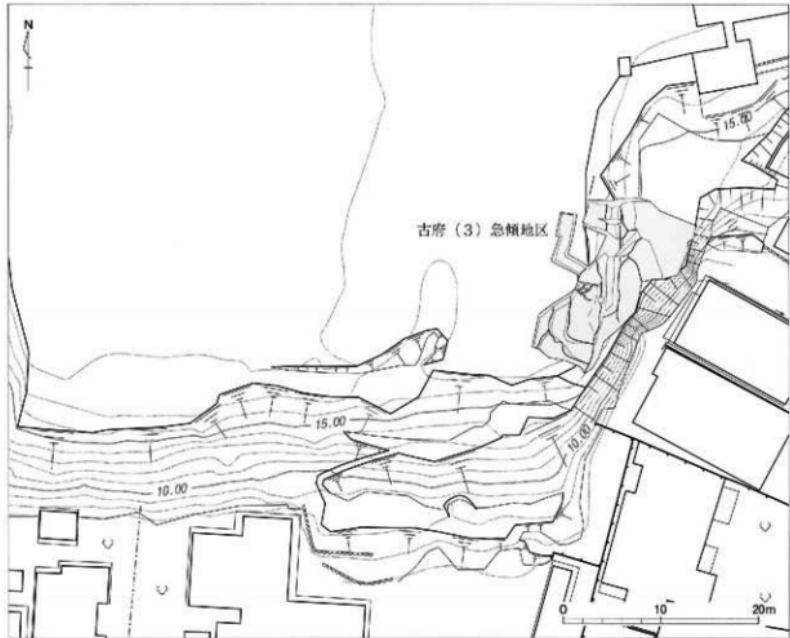
当該地で富山県高岡土木センターによる古府(3)地区総合流域防災(急傾)事業の実施にあたり、工事に伴う立会調査を平成21年9月4日に実施したところ、表土除去を完了した時点で遺構・遺物を確認したため、協議し本発掘調査を実施することになった。

調査経過

発掘調査は、高岡市教育委員会の監理の下、成和建設株式会社・株式会社エイ・テックが実施することになった。調査は平成21年9月14日から実施した。SD02を立会調査時点で確認でき古国府城の堀の可能性が考えられ、その繋がりを確認するため調査地区の一部を西側に拡張した。調査を進めていくとSD02を切るSD01を確認し、また調査地区西側の傾斜地肩部に設定したサブトレーンチからSD01よりも西側に盛土があることを確認した。平成21年9月26日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施し、9月30日に調査を終了した。

基本層序

基本層序は第I層(表土・黒褐色シルト)、第II層(古代遺物包含層・暗褐色シルト)、第III層(地山・黄褐色粘土)、第IV層(地山・灰白色粘土)、第V層(地山・灰白色砂礫層)である。第III層は近接する平成19年能松地区で確認できたが、当調査地区では確認できなかった。



第9図 古府(3)急傾地区位置図 (1/500)

検出遺構

検出遺構は次の通りである。

土壘 1 条 (S A01)

堀址 1 条 (S D01)

溝 (S D02・03)

出土遺物

出土遺物は次の通りである。

土器類：土師器、須恵器、瓦質土器、珠洲、瀬戸美濃、白磁、青磁、越中瀬戸（瀬戸美濃・越中瀬戸は細片のため図示していない）

瓦：古代瓦、埠、近代瓦（近代瓦は細片のため図示していない）

石製品：石鈎丸柄、五輪塔、砾石

銅製品：銅錢

鉄製品：鉄滓

グリッド

調査地区的グリッドは、平面直角座標系の第Ⅷ座標系（原点は北緯 $36^{\circ} 00' 00''$ ・東経 $137^{\circ} 10' 00''$ ）に合わせた。東西をX軸、南北をY軸とし、グリッドの南西隅の数値がそのグリッドを表すもとし、X = 1、Y = 1 の地点は、原点より西へ10.230km、北へ87.705km向かった位置である。一辺5m四方を一区画としてグリッドを割り付け、メッシュを表示した。



第10図 古府（3）急傾地区的調査

1 : 重機掘削（北西）、2 : 溝 S D03 調査風景（西）、3 : 溝 S D02 調査風景（南東）、4 : 土壘 S A01・堀址 S D01 調査風景（南）

第2章 遺構

1. 土壘

土壘 S A01

調査地区的西側（1～3、2～5）区で検出された。南北方向に延びる土壘で、遺構の北側は調査地区外に延び、南側は崖崩れにより肩部が崩落している。東側を堀址 S D01が併走している。規模は長さ16.30m以上、幅5.50m以上を測る。Ⅲ層より上部に盛土し成形しており、残存している高さは73cmを測る。頂部はV層由来の礫層が厚さ約20cm覆っている。

昭和61年調査の御亭角地区 S D09（平成19年調査の能松地区 S D01と同一溝と推定できる）と併走することや能松地区 S A01・02等の位置関係から、主郭に伴う土壘は御亭角地区 S D09の西側に存在すると推定でき、本遺構は主郭に対する東側の帯曲輪に相当するものと推定できる。

出土遺物は、土師器、須恵器、珠洲、白磁、古代瓦である。図示した遺物は、図面04-107である。

2. 堀址

堀址 S D01

調査地区的中央部（2・3、2～5）区で検出された。南北方向に走る堀で、S A01と併走する。断面形はU字状を呈する毛抜堀である。規模は長さ17.30m以上、幅1.70m、底面幅65cm、地山面からの深さは71cm、S A01頂部との比高差は1.95mを測る。覆土は第V層を基本としており、S A01からの流土と推測できる。S D02を切る。出土遺物は、土師器、須恵器、青磁、古代瓦、石鈎丸剣、銅鏡である。図示した遺物は、図面04-108、図面05-203・301・401である。

3. 溝

溝 S D02

調査地区的中央部（2～4、3・4）区で検出された。北東～南西方向に走る溝で、規模は長さ8.50m以上、幅0.40～1.52m、深さ60cmを測る。北東側は崖崩れにより崩落しており、南西側は調査地区外へ延びる。S D01に切れ、S A01直下のⅢ層より下層から掘り込まれる。出土遺物は、土師器、須恵器、越中瀬戸、古代瓦である。図示した遺物は、図面04-101～103・202である。

溝 S D03

調査地区的南側（2・3、2・3）区で検出された。調査地区内で屈曲する溝で、規模は長さ6.80m以上、幅1.00～1.80m、深さ26cmを測る。北側は調査地区外に延び、南側はS D01肩部で収束する。平面形および断面形が不整形であることから、雨水等の流路の可能性が高い。出土遺物は、土師器・須恵器・瓦質土器、珠洲、古代瓦、鉄滓である。図示した遺物は、図面04-106、図面05-303・501である。

第3章 遺物

1. 土器類

古代

須恵器

杯A 図面04-101・102。高台が付かない杯である。

杯B 図面04-103。高台が付く杯である。

中世

土師器

皿 図面04-104・105。いずれも非クロの手づくね製法の製品である。105は内外面に油煙が付着する。

瓦質土器

浅鉢 図面04-106。平面形が方形の浅鉢の口縁部である。外面に印花紋を施す。

白磁

椀 図面04-107。口縁部に小さな玉縁を持つ椀の口縁部である。

青磁

椀 図面04-108。鍋薙弁の椀の口縁部である。

2. その他の遺物

古代瓦 図面04-201・202、図面05-203。いずれも平瓦である。201は7世紀中葉以降の白鳳時代に比定されているいわゆる御亭角廐寺所用瓦である。印き目は、西井龍儀氏の分類（西井1983）のB₂にあたり、斜行する大型の格子で端部は三角形や、台形になる。格子は方形と短形となる。202・203は8世紀中葉～後奈に比定される越中国分寺所用瓦である。202・203は凸面を繩印き痕がある。

埠 図面05-204。表面と側面は繩印き後ナデを施す。裏面は角を面取り、離れ砂抜がある。

石跨丸柄 図面05-301。左半部は欠損している。中央上部は上ド2箇所の孔が、右側には1箇所の孔が確認できる。粘板岩製である。

五輪塔 図面05-302。火輪である。表面は風化が著しい。岩崎石製である。

砥石 図面05-303。両側面が欠損している砥石である。砂岩製である。

銅錢 図面05-401。開元通寶（唐、621）である。

鉄滓 図面05-501。椀型滓である。磁着する。

第4章 結 語

遺構の時期

今回の調査地区は、古代越中国の国庁推定地でもある雲龍山勝興寺の南西側に位置し、小字名から御亭角遺跡と称される地区である。御亭角遺跡は、白鳳時代の寺院「御亭角庵寺」の存在が想定されるとともに、中世の城郭遺構である土塁や堀などから古国府城の存在も確認できる遺跡である。当調査地区的遺構の時期は以下の通りである。

1. 奈良～平安時代（越中国）：溝 S D02
2. 戦国時代（古国府城）：土塁 S A01、堀址 S D01

奈良時代～平安時代

当該期の遺構として溝 S D02がある。S D02からは8世紀後半～9世紀にかけての須恵器や国分寺瓦が出土している。国庁に関する時期のものではあるが、直接関連付けできない。

中世の遺構である堀址 S D01から石鈎丸柄が出土した。越中国府関連遺跡で鈎頭飾りが出土したのは初見である。当遺跡周辺では、高岡市東木津遺跡で銅鈎丸柄の裏金具が出土している。また開元通寶が出土しているが、錢銘が不鮮明であり、後世の私鑄銭の可能性が高い。

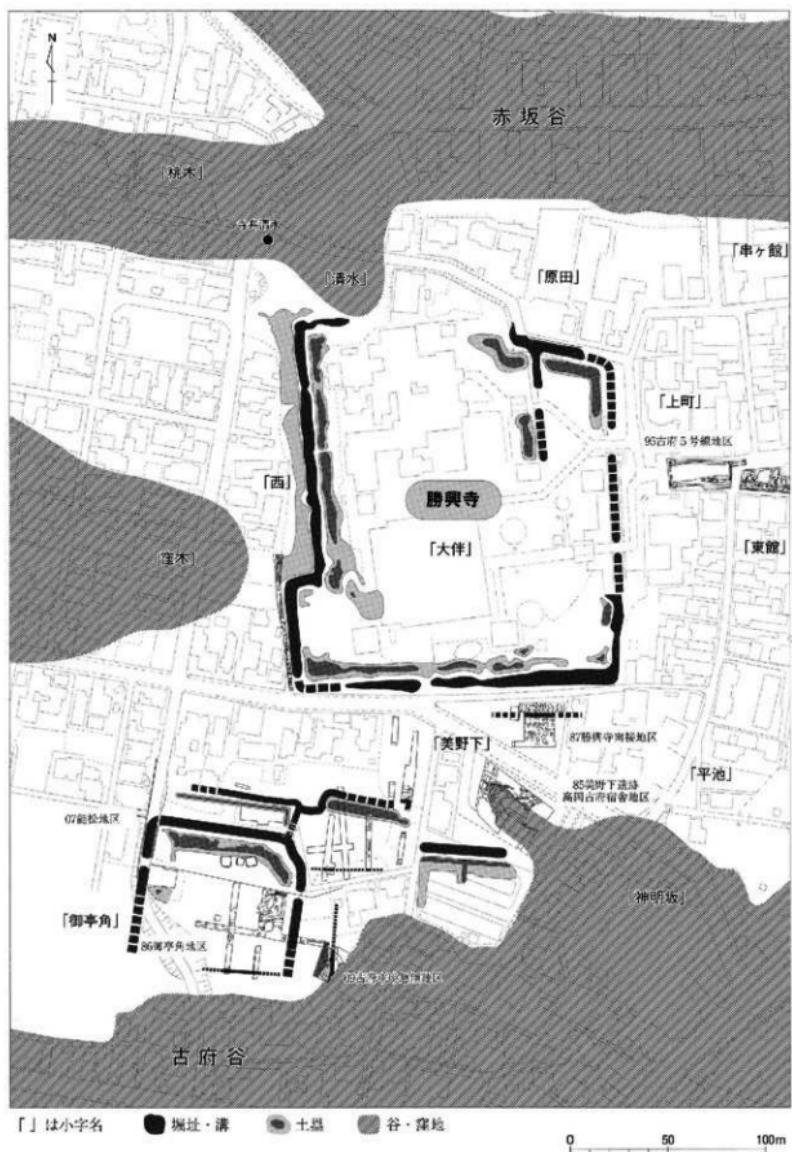
平安時代後期の遺物としては、白磁が土塁 S A01の覆土より出土しており、11世紀後半～12世紀前半に位置付けできる。御亭角地区 S D01、下水道地区 S K02や平成19年能松地区では、山縁部に二段ナデを施す非ロクロ形の土師器皿や白磁などが出土しており、區府が依然として地域拠点としての役割を維持していたことを示している。

戦国時代

当該期の遺構として土塁 S A01、堀址 S D01がある。雲龍山勝興寺が寺地を寄進される天正12（1584）年以前に城郭（古国府城）がすでに存在し、それを勝興寺が城郭守院として繼承したとするのが通説である。

当遺跡の遺構・遺物は、鎌倉～室町時代にかけてのものが少なく、戦国時代になると増加することから、古国府城は戦国時代に築城されたと推測されている。古国府城は、四方を谷や崖地に囲まれた天然の要害であり、勝興寺境内が本丸であることが有力視されている。また、その周辺にある単郭壁や館跡を含めた縄張りは明らかになっていない。御亭角地区に立地する土塁や堀は単郭の弊ないし館跡と推測されていたが、能松地区の調査から主郭北側の腰曲輪の存在が明らかとなった。本調査地区でも土塁 S A01と堀址 S D01を確認した。御亭角地区 S D09（能松地区 S D01）と並行していることから、御亭角地区 S D09と当調査地区的 S A01～S D02の間が主郭東側の腰曲輪であることが明らかとなった。また、S D01の東側の地山（第V層）面はほぼ水平になっていることから切岸による帯曲輪が存在した可能性もある。

本調査地区からは射水平野が一望でき、守護所である放生津城をはじめ、増山城・日宮城・白鳥城など、戦国時代に神保氏が関係した城館が確認できる。また、背後には二上丘陵上の守山城も確認でき、古国府城は守山城の出城に位置づけられている。古国府城は守山城主神保氏強によって築城したとされ、当遺跡出土の戦国時代における土師器皿群は16世紀第3四半期を中心としていることから、神保氏強築城説とは時期的に符合する。古国府城は神保氏の重要な拠点の一つとして位置付けできるだろう。



第11図 古国府城間連造構配図 (1/2,500)

第5章 付載－近代瓦

はじめに

ここに報告するのは、平成20年5月21日、矢田上町急傾斜地法枠工地区で採取した、近代瓦と関連遺物である。瓦は素焼き段階までのもの（未完成とした）と釉薬が掛かり木焼きされたもの（完成品とした）があり、壇や窯道具とした土製品も出土した。主要な瓦は、10数枚の瓦の積み重ねが3列以上見られ、手前より1・2列目のもので残存状態が比較的良好なものを20枚採取し、今回図示した。他の遺物も付近からの出土である。

伏木の瓦生産

現代の瓦産業に直接繋がる県内の瓦生産については、明治初年までに、伏木・水戸・安養寺・安居等において生産が開始されていたとされる。特に伏木が発祥地とされる。伏木における明治大正時代の瓦工人が能登・三河出身者が多かったことより、ここより技術・人材が移入されたと推定されている。

伏木における瓦生産に関する文献資料として、延享元年（1744）放生津弥兵衛等による瓦生産の申し込みを示すものがあり、これが開始年代の上限と言えよう。また文化11年（1814）伏木での瓦焼きを示すものがあり、これが開始年代の下限と言えよう。開始の時期について『射水郡誌』は宝曆～明和（1751～1771）頃とされ、正和勝之助氏は大明7年（1787）～寛政9年（1797）の約10年の間が妥当であるとされている。

伏木の瓦は当初焼し瓦であり、その後べんがら釉の瓦となり、さらに改良が加えられマンガンを含む釉薬瓦へとなった。瓦生産が本格化するのは明治時代になってからであり、原料となる瓦粘土の枯渇等のため、昭和40年頃には終焉を迎えた。

瓦工場については、明治42年（1909）の『射水郡誌』は12箇所を記録し、風見善次氏は昭和7年（1932）において17箇所の存在を示している。瓦工場の位置については、古岡英明氏と正和氏が地図上に明示されており裨益すること大である。両氏の資料より、今回報告の瓦は、大指善右衛門経営による大指工場のものであることは確実である。工場は瓦採取地の直ぐ上方の平坦地である。古岡氏によれば大指工場は大正年間に操業され、昭和30年（1955）以前に廃業となっている。

軒棟瓦

図面06-601・602。万十軒瓦のような小巴が付かない鎌軒瓦で、601は素焼き段階の未完成品で、602は完成品である。均整唐草文を施し、全幅は601を35.3cm、602を29.6cmに想定復元した。

棟瓦

図面06-621・622、図面07-12-603-620。605～622は頭と尻に切り込みがある切落棟瓦の素焼き段階の未完成品である。尻の切り込み付近に釘穴を1箇所有し、穿孔は表側から施されている。水垂れ部分に丸刻印「大」が付けられるが、605・612は谷部分に、603・607・610・611は切り込み部付近に、それ以外は棟側に付けられている。表面は丁寧にナデられるが、裏面は雑なナデである。尻の木口部分には、焼成前の乾燥時に付着したと推測される砂がみられる。621・622は本焼きされ、釉薬がかかっている棟瓦2点が発着したものである。釉薬は黒黝色を呈し、尻付近を除くほぼ全面に施されると思われる。尻の木口部分には砂が付着する。厚さは1.8～2.4cmと薄手である。

駒型雪止瓦

図面13-623～625。雪止瓦には、棟の上に突起を付けた駒型雪止瓦と、谷の部分に雪止を付ける輪型雪止瓦があるが、出土品は駒型雪止瓦である。尻側に釘穴が2箇所穿孔される。623は素焼きされた未完成品の破片である。624・625は本焼きされ釉薬がかかっているが、雪止の突起が剥離したものである。剥離面にはカ

キヤブリの痕跡が残る。釉薬は尻付近を除く、ほぼ全面に施される。625の頭側には、表裏の同位置にトチノ痕が残る。このトチノ痕は瓦の中心に向かって斜行し、溝状の凹凸が連続する。この凹凸の幅及び間隔は窯道具（「長棒」）の片面に施されたカキヤブリの痕跡と一致している。624の水垂れ部分には瓦を積み重ねて焼成した際のトチノ痕が2箇所みられるが、このトチノ痕の幅も「長棒」と一致する。

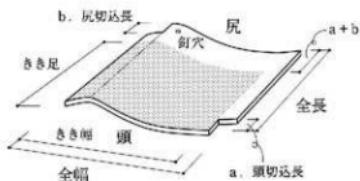
埠

図面06-626。長さ35.7cm、幅24.6cm、厚さ8.5cmの埠である。全体に砂が付着し、部分的に黒色の釉がかかっている。

窯道具等

図面14-627~633。627~630は「栓ころ（せんころ）」と呼ばれるもので、立てられた瓦相互の上端の間に置くものである。文字通り栓状を呈している。

631~632は2点が癒着したものである。「長棒（ながぼう）」等と呼ばれ、瓦の下端に敷くものである。瓦を縦に2段並べる場合も、その中间に置くようである。633は苔状を呈すもので、用途等は不明である。



第12図 棟瓦概念図

番号	図面	種類	全長	全幅	きき足	きき幅	頭切込長	尻切込長	厚さ	特徴等	出土位置
603	07	棟瓦・素焼き	34.1	34.1	26.2	30.0	3.9	4.0	2.4	丸刻印「大」	1列目
604	07	棟瓦・素焼き	34.6	34.3	25.5	29.8	4.4	4.7	2.2	丸刻印「大」	1列目
605	07	棟瓦・素焼き	34.2	33.9	25.4	29.7	4.6	4.2	2.9	丸刻印「大」	1列目
606	08	棟瓦・素焼き	33.4	33.9	25.6	29.1	3.9	3.9	2.2	丸刻印「大」	1列目
607	08	棟瓦・素焼き	34.0	33.5	26.1	29.2	3.9	4.0	1.8	丸刻印「大」	1列目
608	08	棟瓦・素焼き	33.9	33.6	26.1	29.7	3.8	4.0	2.0	丸刻印「大」	2列目
609	09	棟瓦・素焼き	33.9	33.3	25.7	29.5	4.0	4.2	2.2	丸刻印「大」	1列目
610	09	棟瓦・素焼き	33.9	33.4	24.9	28.9	4.5	4.5	2.3	丸刻印「大」	2列目
611	09	棟瓦・素焼き	33.9	33.3	25.5	29.4	4.3	4.1	2.2	丸刻印「大」	2列目
612	10	棟瓦・素焼き	35.1	34.0	26.6	29.8	4.3	4.2	2.3	丸刻印「大」	2列目
613	10	棟瓦・素焼き	34.0	34.3	26.7	30.5	3.3	4.0	2.3	丸刻印「大」	2列目
614	10	棟瓦・素焼き	34.0	33.9	25.4	29.4	4.3	4.3	2.2	丸刻印「大」	2列目
615	11	棟瓦・素焼き	34.5	33.9	26.1	30.0	4.0	4.4	2.1	丸刻印「大」	2列目
616	11	棟瓦・素焼き	34.0	33.7	26.7	29.0	3.4	3.9	2.2	丸刻印「大」	2列目
617	11	棟瓦・素焼き	34.3	33.5	25.7	29.7	4.3	4.3	2.3	丸刻印「大」	2列目
618	12	棟瓦・素焼き	33.4	33.6	25.0	29.5	4.0	4.4	2.2	丸刻印「大」	1列目
619	12	棟瓦・素焼き	33.0	33.7	25.8	29.8	3.8	3.4	2.2	丸刻印「大」	2列目
620	12	棟瓦・素焼き	34.4	34.6	27.0	30.1	3.3	4.1	2.4	丸刻印「大」	2列目
624	13	雪止瓦・本焼き	33.3	32.4	25.4	29.0	3.7	4.2	2.4	釉薬=黒勘色、略全面施釉	2列目
625	13	雪止瓦・本焼き	32.3	33.3	24.7	29.0	4.0	3.6	2.2	釉薬=黒勘色、略全面施釉	2列目

第2表 越中国府間連遺跡矢田上町急傾斜地法杵工地区 近代棟瓦計測表

参考文献

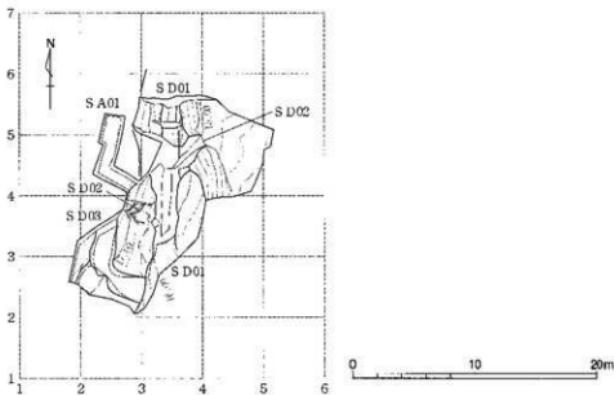
- 秋山古次郎他 1909 「射水郡誌 下巻」 富山県射水郡役所 (1978 名著出版復刻版)
- 上野 草雄 1984 「小杉流通業務団地遺跡群 - 第6次緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会
- 風見 善次 1933 「伏木町に於ける瓦製造業」 富山県伏木商業学校
- 正和 勝之助 1991 「越中伏木地理志稿」 桂書房
- 坪井 利弘 1976 「日本の瓦屋根」 理工学社
- 坪井 利弘 1986 「圓錐瓦屋根 (改訂版)」 理工学社
- 坪井 利弘 1987 「桟瓦屋根のアザイン「瓦屋根の納め片」 改題・改訂版」 理工学社
- 西井 龍儀 1983 「御亭角遺跡出土の瓦について」 「小杉流通業務団地内遺跡群 - 第5次緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会
- 西井 龍儀他 1987 「北陸の古代寺院 - その源流と古瓦」 (北陸古瓦研究会編) 桂書房
- 橋本 正春他 1983 「小杉流通業務団地内遺跡群 - 第5次緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会
- 古岡 英明 1955 「伏木の瓦工業」 伏木小学校
- 古岡 英明 1956 「當の伏木」 「學習資料 - 伏木の文化」 伏木小学校
- 古岡 英明 1960 「勝興寺付近遺存の漁器について (前)」 「越中史蹟」第19号 越中史蹟会
- 古岡 英明 1960 「勝興寺付近遺存の漁器について (後)」 「越中史蹟」第20号 越中史蹟会
- 古岡 英明 1994 「勝興寺地域の考古学的知見」 「越中勝興寺伽藍」 高岡市教育委員会
- 古岡 英明 2007 「守山麓 - 古国府城考」 「二上山研究」第4号 高岡市教育委員会
- 水島 清他 2001 「北陸の瓦の歩み」 社団法人日本セラミックス協会北陸支部
- 淡 辰他 1967 「越中國分寺とその周辺の遺跡調査報告書」 富山県教育委員会

報告書抄録

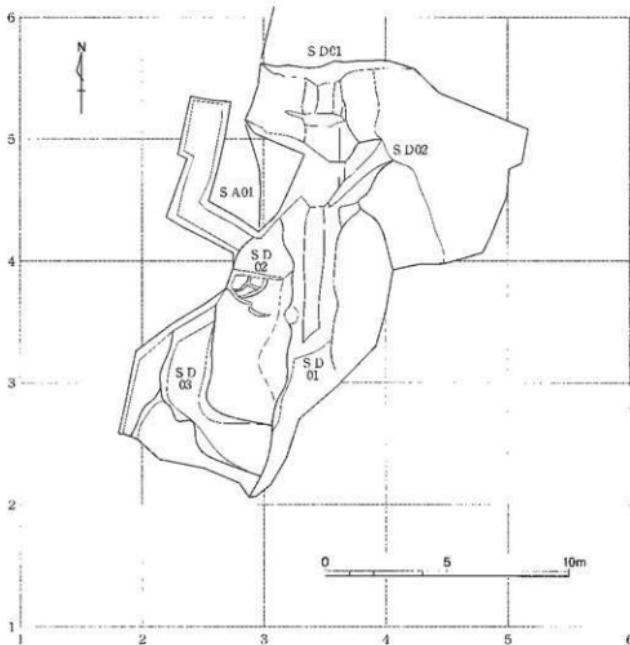
ふりがな	えちゅうこくふかんれんいせきちょうさほうこく						
書名	越中国府関連遺跡調査報告						
副書名	古府(3)地区総合流域防災(急傾)事業に伴う平成21年度の調査						
卷次							
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第21番						
編著者名	岡田一弘、山口辰一						
発行機関	高岡市教育委員会						
所在地	〒933-8601 富山県高岡市広小路7番50号						
発行年月日	西暦 2010年2月26日						
ふりがな	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度	東經 度	調査期間	調査面積	調査原因
越中国府関連遺跡 古府(3)急傾地区	富山県高岡市 伏木古府	016202	202013	36° 137° 47° 03° 26° 02°	090914 151m ² 090930		急傾斜地 崩壊対策工事
越中国府関連遺跡 尖田上町(1)地区	富山県高岡市 伏木尖田上町	016202	202013	36° 137° 47° 02° 06° 44°	090521 384m ² 090526		急傾斜地 崩壊対策工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
越中国府関連遺跡	寺院跡 宮衛城	戦国時代	土塁1条 堀辻1条 溝2条	土師器、須恵器 瓦質土器、珠洲 瀬戸美濃、白磁 青磁、越中瀬戸 古代瓦、塔 近代瓦、石鈎丸鞘 五輪塔、砥石 銅鏡、鐵滓	戦国時代の土塁と堀辻 の確認。		

図 面

図面〇一
遺構実測図
古府(3)急傾地区

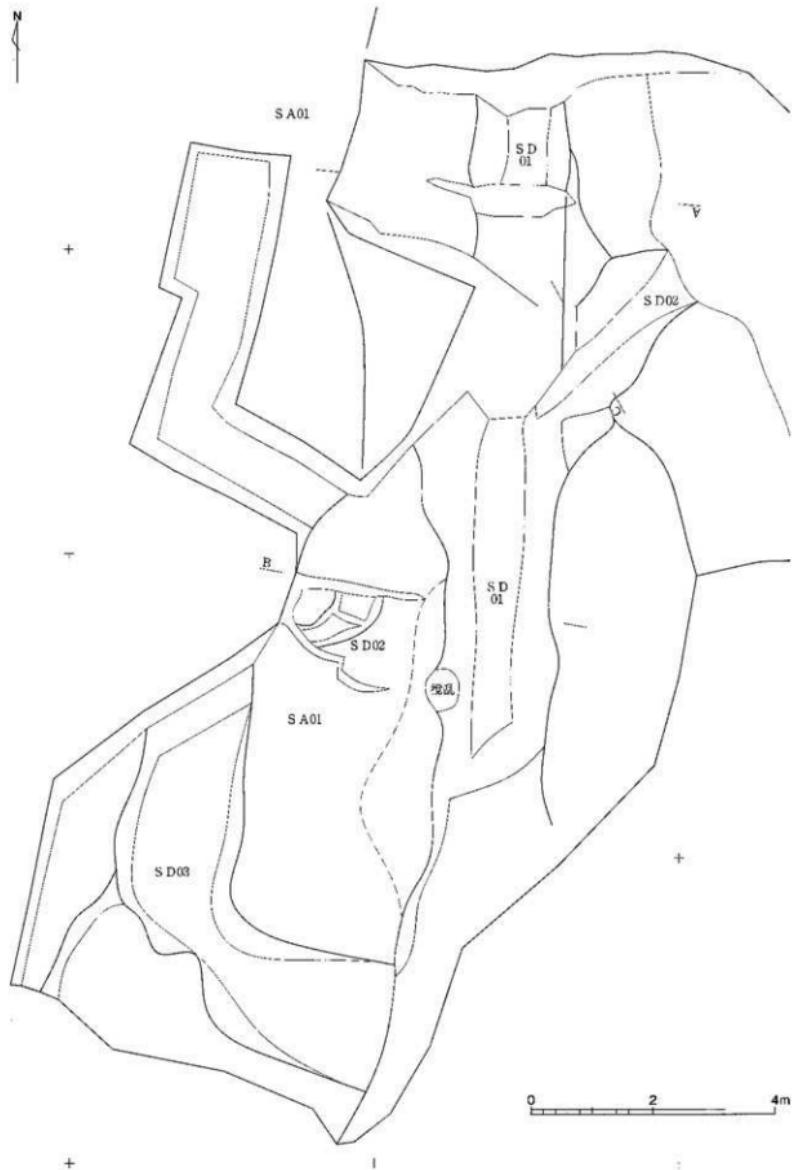


1. 遺構全体図 縮尺1/400



2. 遺構平面図 縮尺1/200

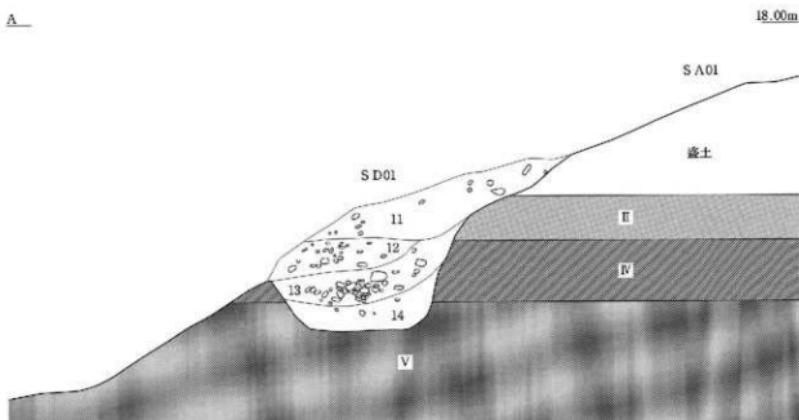
図面〇二
遺構実測図
古府(3)急傾地区



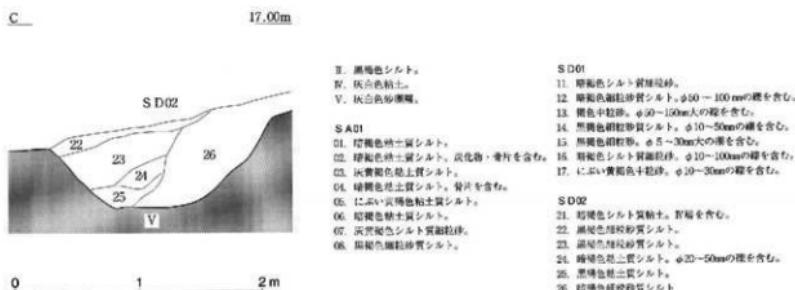
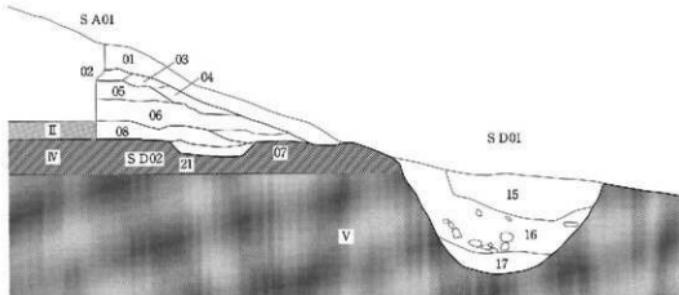
土壙 S A01、掘址 S D01、溝 S D02・03実測図

縮尺 1/80

図面〇三 遺構実測図 古府(3)急傾地区



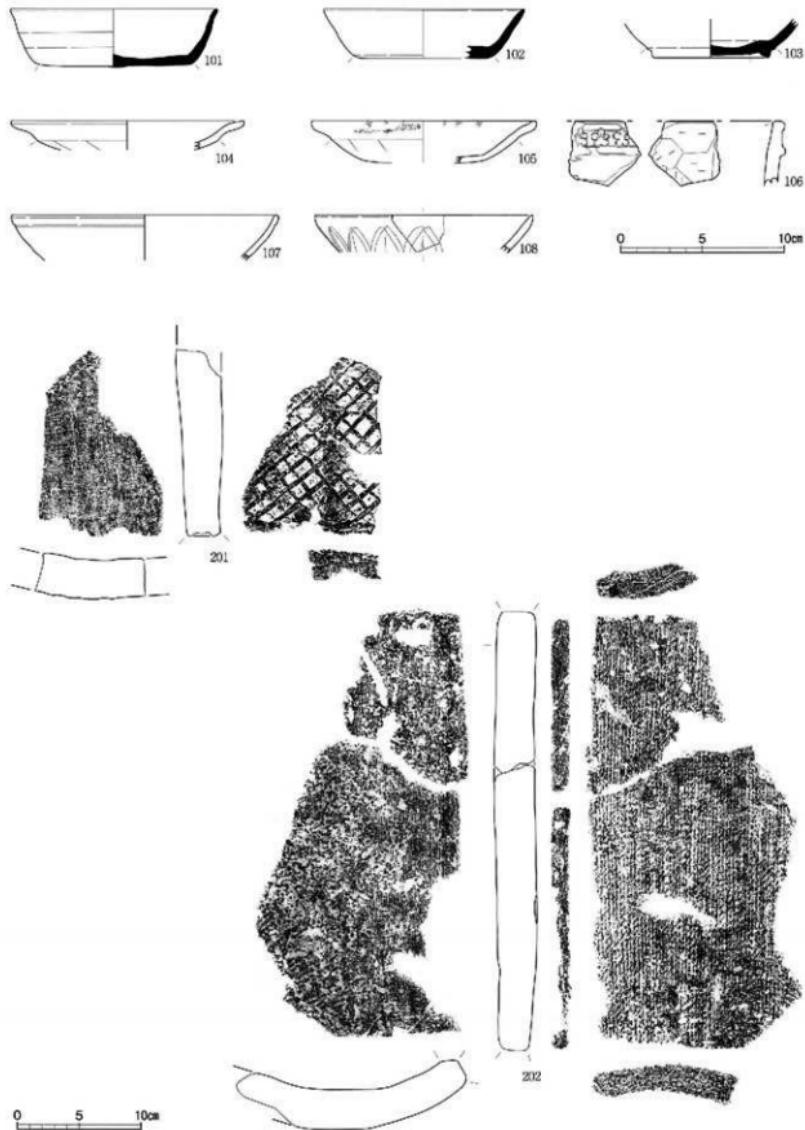
18.00m



土壌 S A01、堀址 S D01、溝 S D02上層図

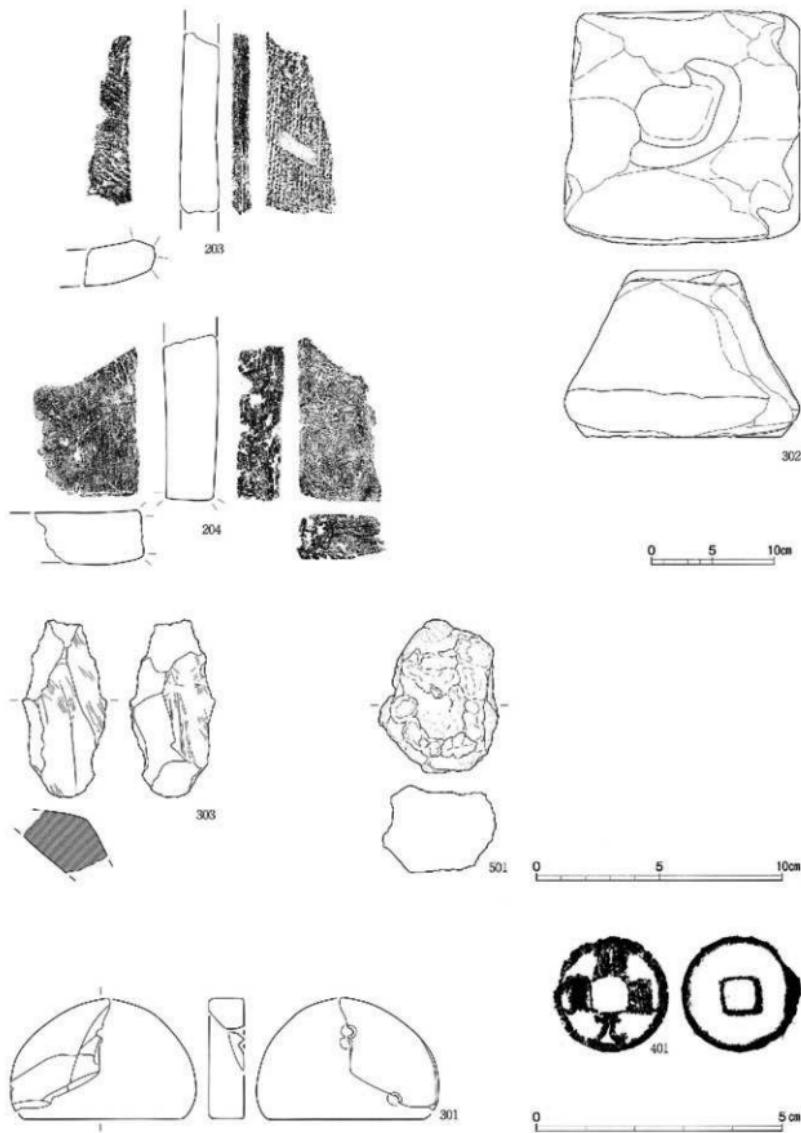
縮尺 1/40

- | | |
|--|---|
| III. 黒褐色シルト。
IV. 灰白色粘土。
V. 灰白色砂礫層。 | SD01
11. 黑褐色シルト質耕作地。
12. 単純色崩柱砂質シルト。φ50~100mmの礫を含む。
13. 深色中粒砂。φ50~150mmの大粒の礫を含む。
14. 黑褐色研磨物質シルト。φ10~50mmの礫を含む。
15. 黑褐色シルト質耕作地。φ5~30mmの大粒の礫を含む。
16. 黑褐色シルト。φ10~100mmの礫を含む。
17. にじむ黄褐色中粒砂。φ10~30mmの礫を含む。 |
| S A01
01. 砂褐色粘土質シルト。
02. 砂褐色粘土質シルト。灰化帯、骨片を含む。
03. 灰褐色粘土質シルト。
04. 砂褐色粘土質シルト。
05. にじむ灰褐色粘土質シルト。
06. 砂褐色粘土質シルト。
07. 灰黃褐色シルト質耕作地。 | SD02
21. 砂褐色シルト質耕作地。耕作を含む。
22. 深色中粒砂質シルト。
23. 深色中粒砂質シルト。
24. 砂褐色粘土質シルト。
25. 黑褐色粘土質シルト。
26. 砂褐色細粒砂質シルト。 |



土器類－須恵器：101～103、土師器：104・105、瓦質土器：106、白磁：107、青磁：108
古代瓦－白鳳時代の平瓦：201、奈良時代の平瓦：202
縮尺1／3・1／4

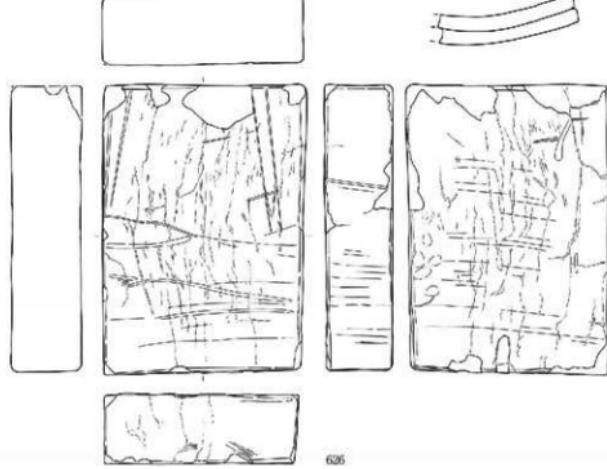
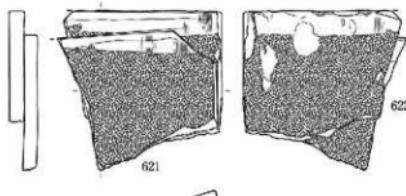
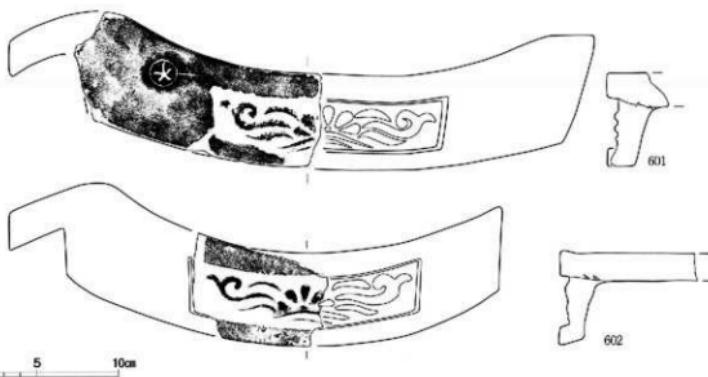
図面〇五 遺物実測図 古府(3)急傾地区



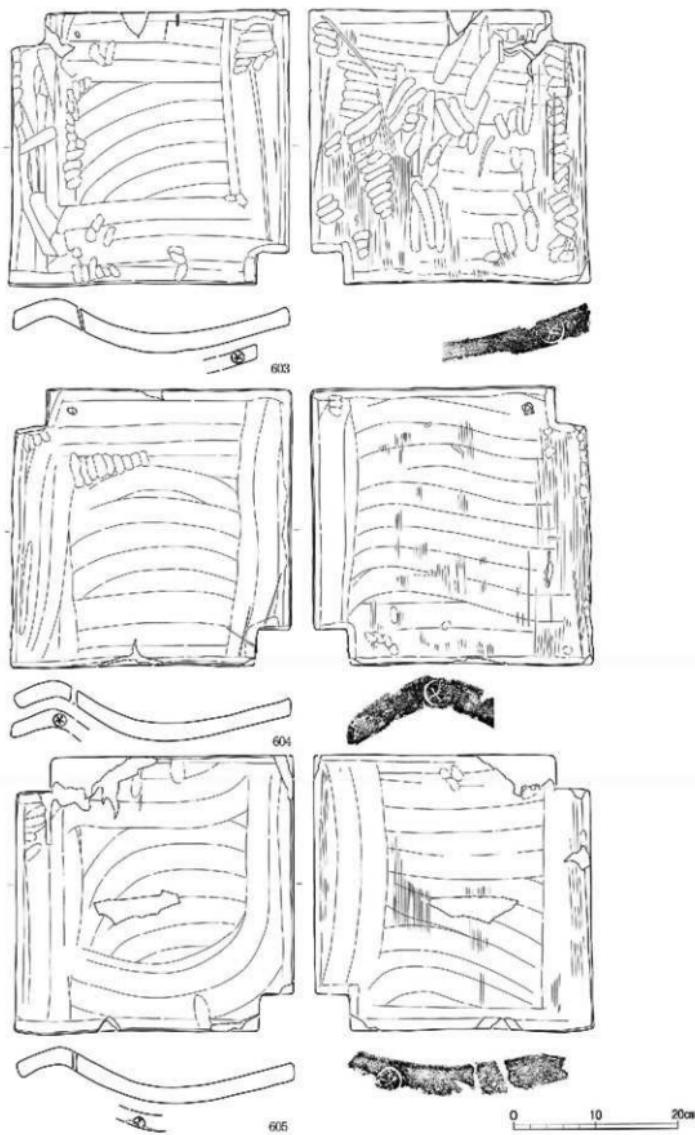
古代瓦 - 奈良時代の平瓦 : 203、埴 : 204、石製品 - 石誂丸額 : 301、五輪塔 : 302

砥石 : 303、銅製品 - 銅錢 : 401、鉢 : 501

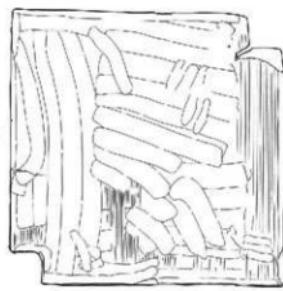
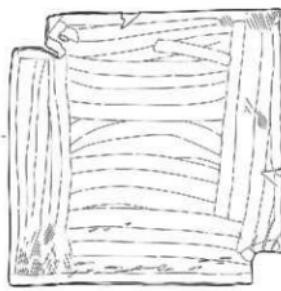
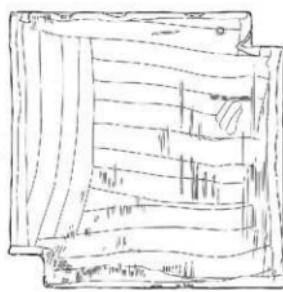
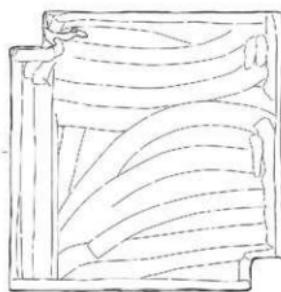
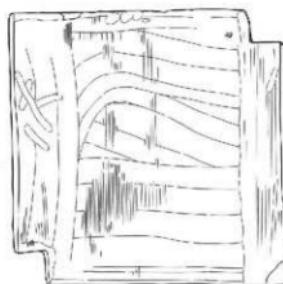
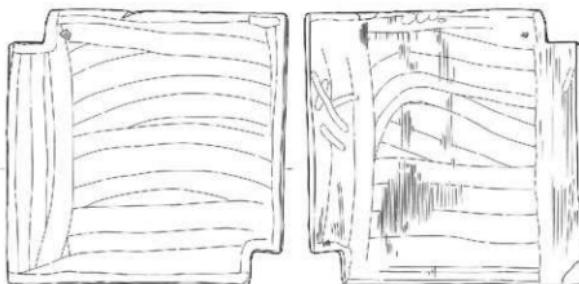
縮尺実大・1/2・1/4



図面〇七 遺物実測図 矢山上町(1)地区



図面〇八　遺物実測図　矢田上町（1）地区

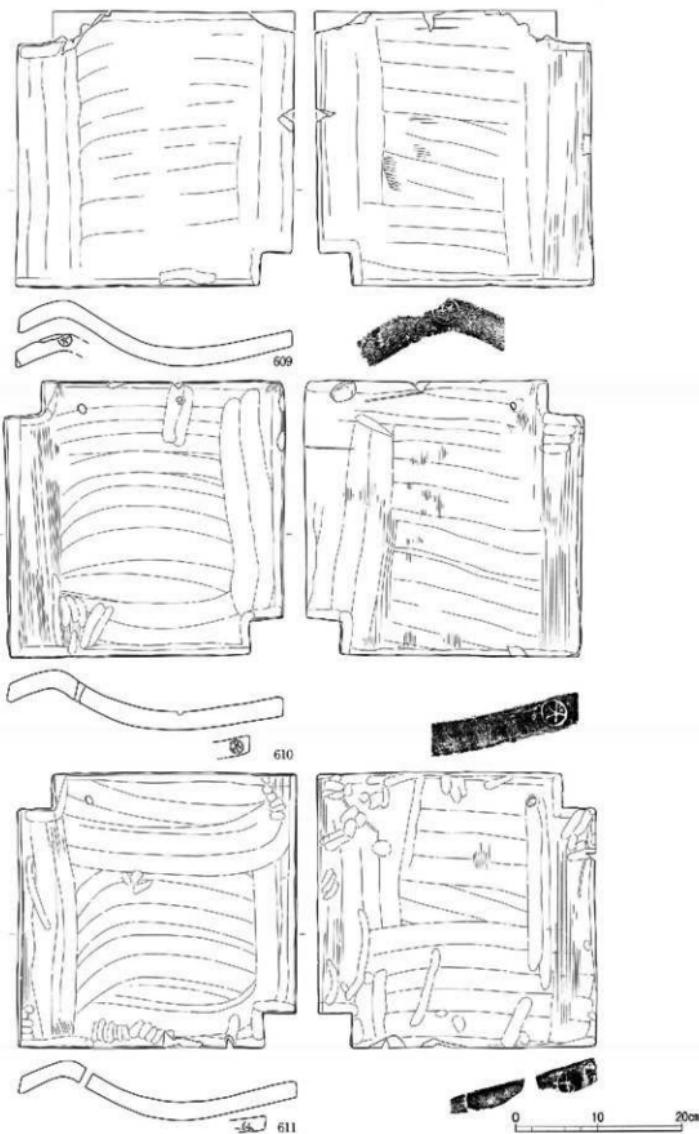


0 10 20cm

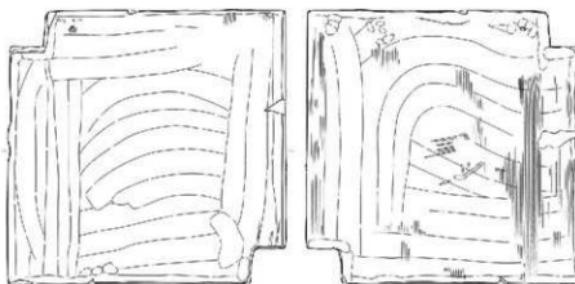
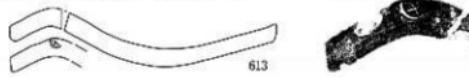
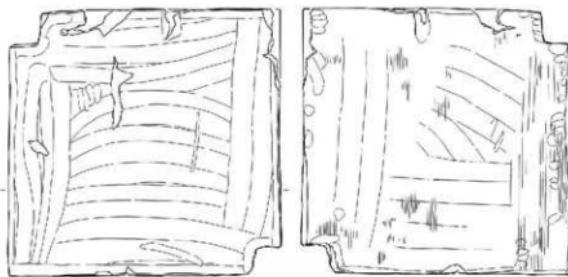
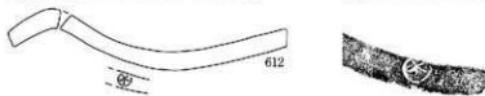
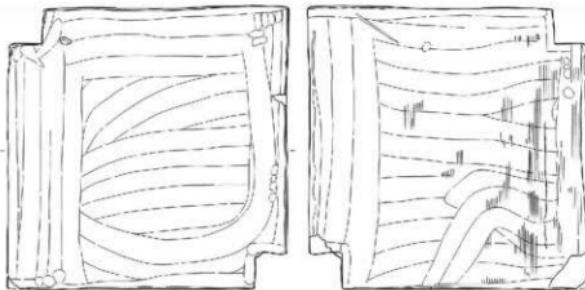
棟瓦

縮尺1/6

図面〇九 遺物実測図 矢田上町(1)地区

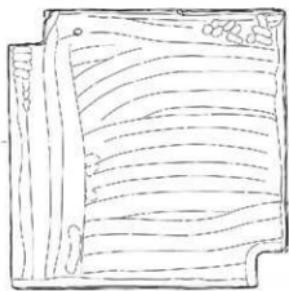
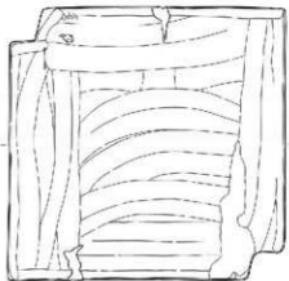
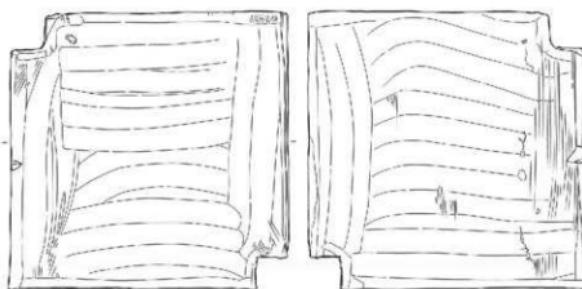


図面一〇 遺物実測図 矢田上町(1)地区

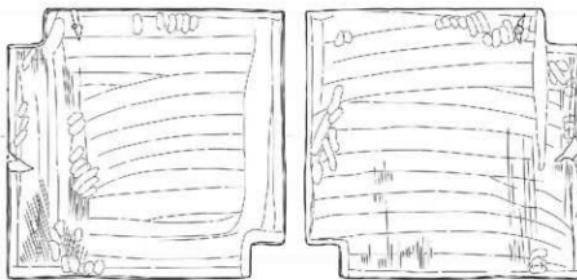


0 10 20cm

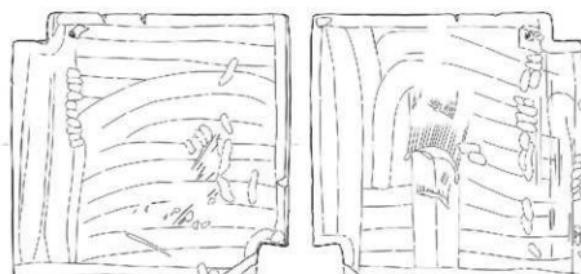
図面一 遺物実測図 矢田上町(1)地区



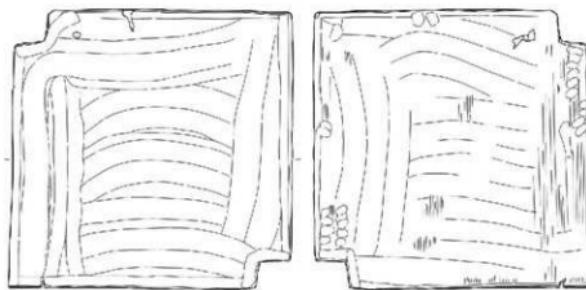
0 10 20cm



618

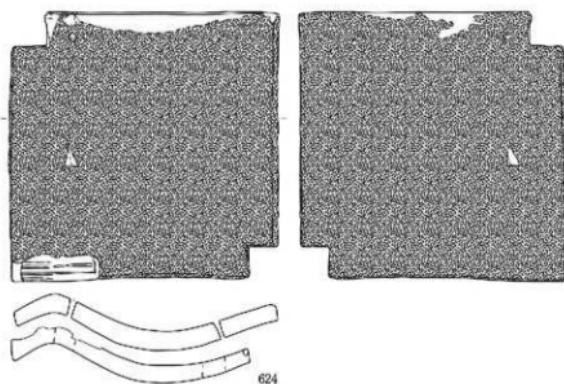


619

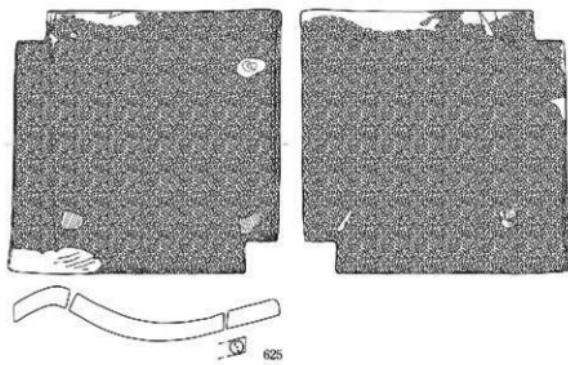


620

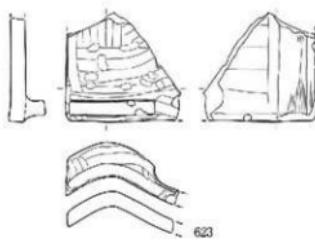
0 10 20cm



624



625



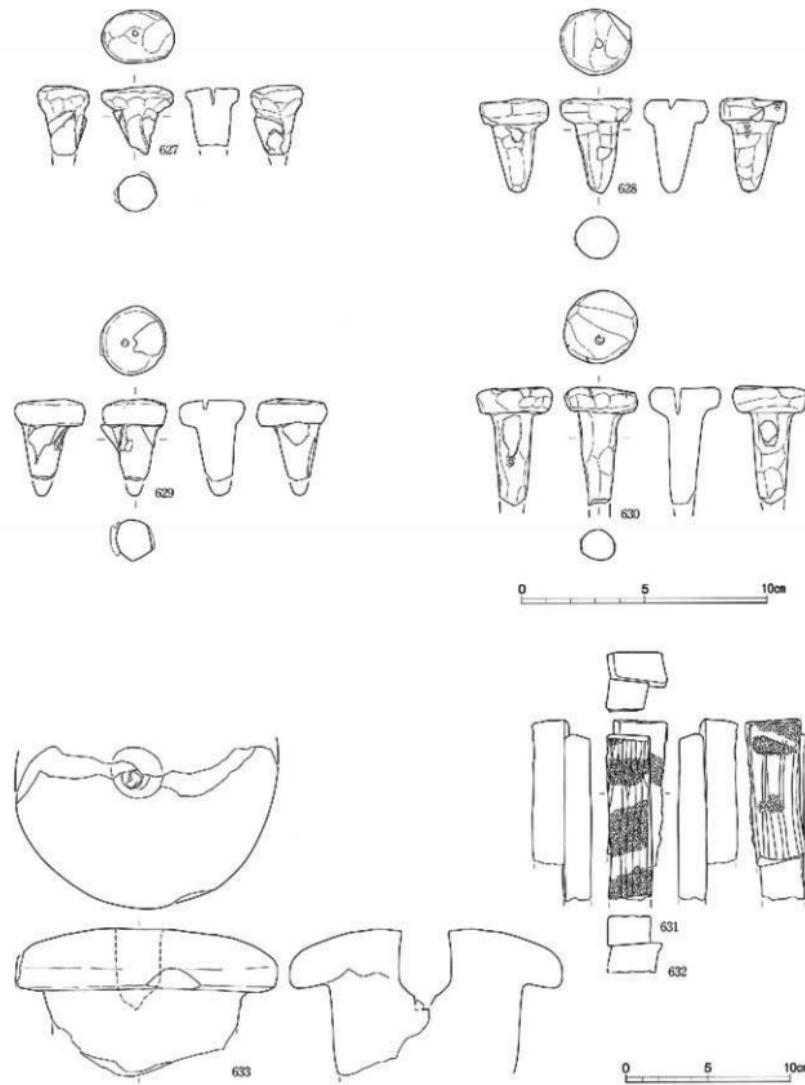
623

0 10 20cm

桟瓦(駒形雪止瓦)

縮尺1/6

図面一四 遺物実測図 矢田上町(1)地区



麻道具

縮尺 1/2・1/3

図 版

図版〇一
遺構写真 古府(3)急傾地区



1. 調査地区遠景(南)



2. 調査地区全景(南東)

圖版〇二
遺構写真
古府(3)急傾地区



1. 調査地区全景(東)



2. 調査地区全景(上方)



1. 土星S A01・堀址S D01全景（北西）



2. 土星S A01・堀址S D01全景（南）



1. 土壘SA01土層（南）



2. 堀址SD01土層（南）

図版〇五
遺構写真 古府(3) 急傾地区



1. 溝S D02全景（北東）



2. 溝S D02土層（北東）



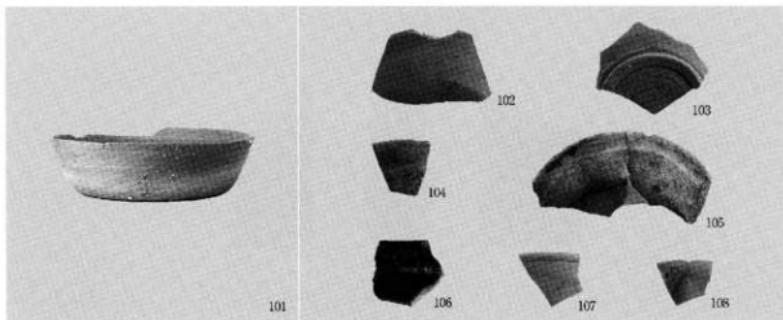
1. 矢田上町（1）地区
急傾斜地
瓦出土状態（西）



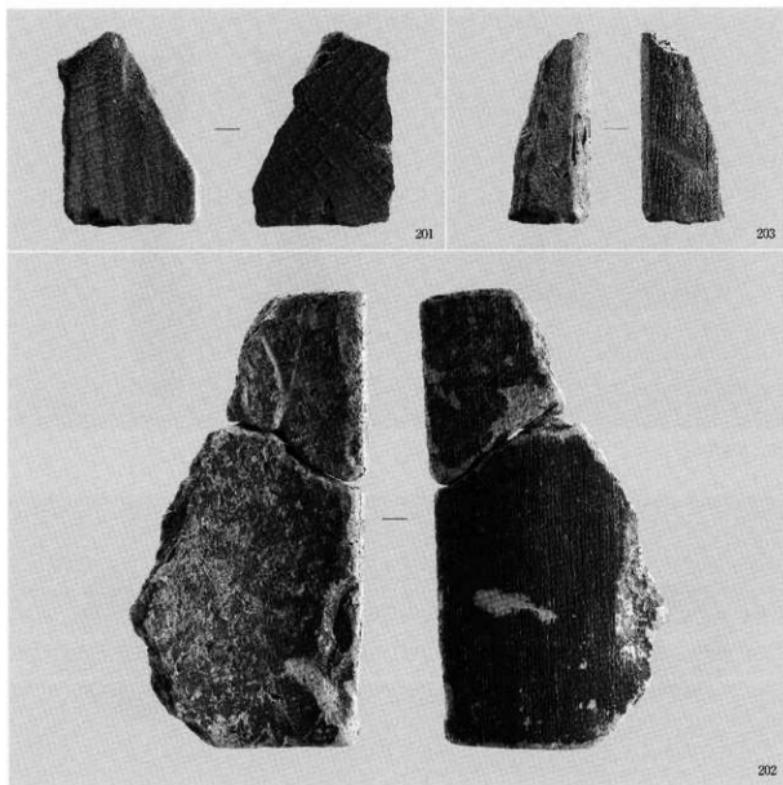
2. 矢田上町（1）地区
急傾斜地
瓦出土状態（西）



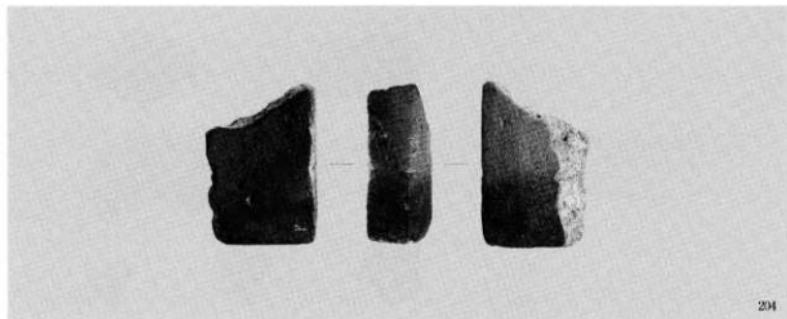
3. 矢田上町（1）地区
急傾斜地
瓦出土状態（北西）



1. 土器類

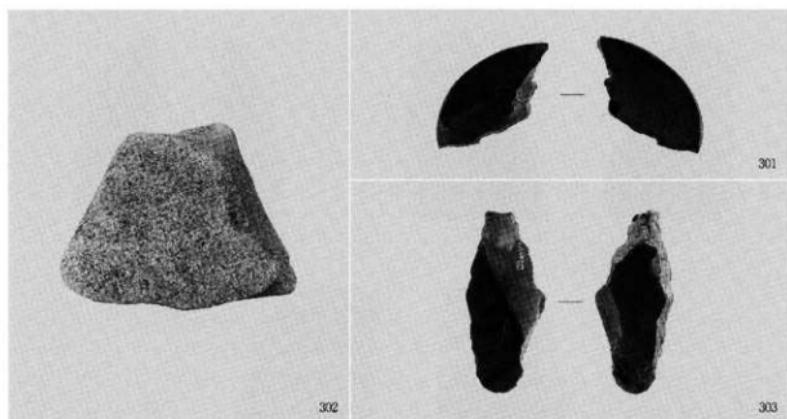


2. 古代瓦 - 平瓦



1. 古代瓦—場

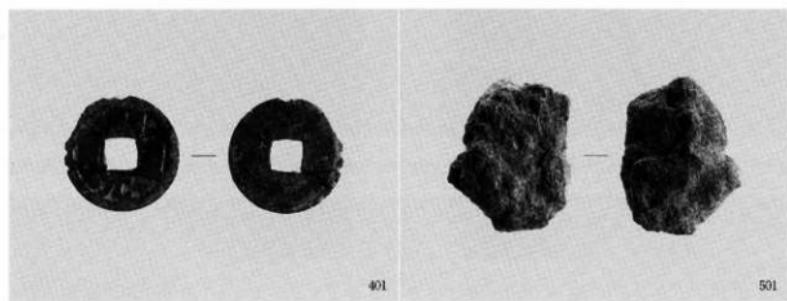
204



2. 石製品

301

303



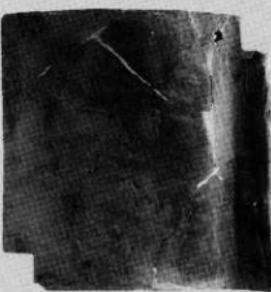
3. 銅製品、鐵滓

401

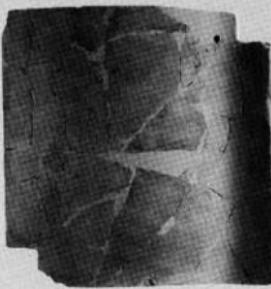
501



603



604



605

近代瓦 - 模瓦



606



607

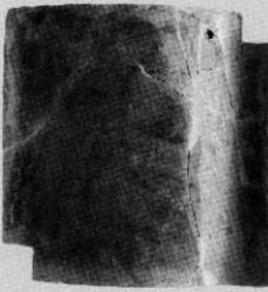
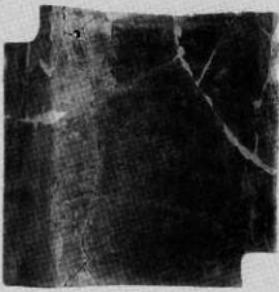


608

近代瓦 - 棱瓦



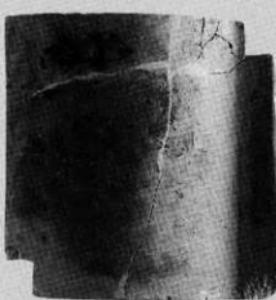
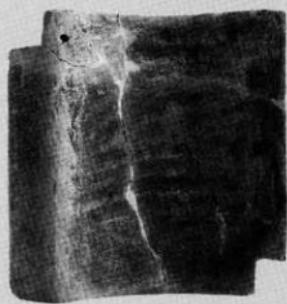
609



610



611



612



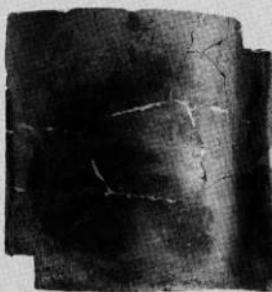
613



614

近代瓦 - 棱瓦

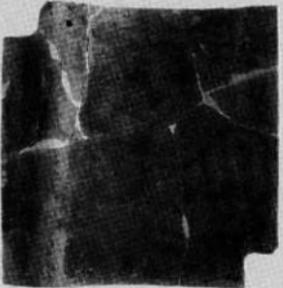
図版一三 遺物写真 矢田上町(1)地区



615

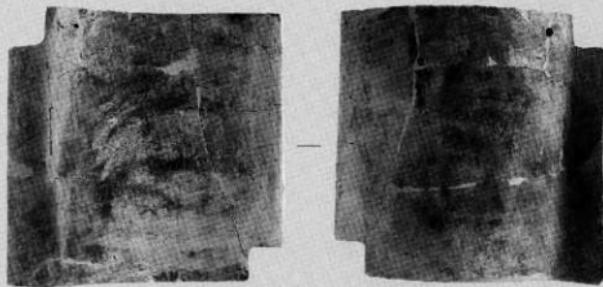


616

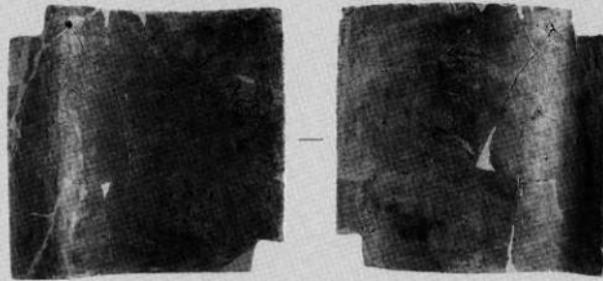


617

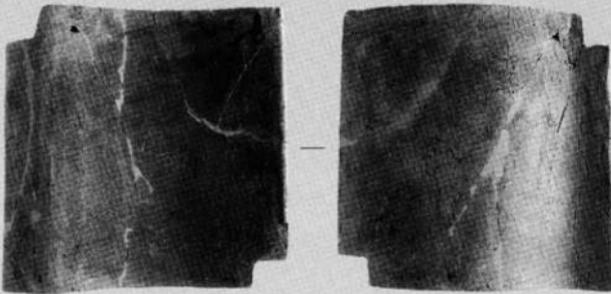
近代瓦 - 棱瓦



618



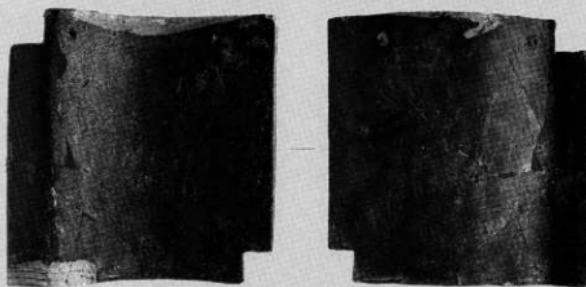
619



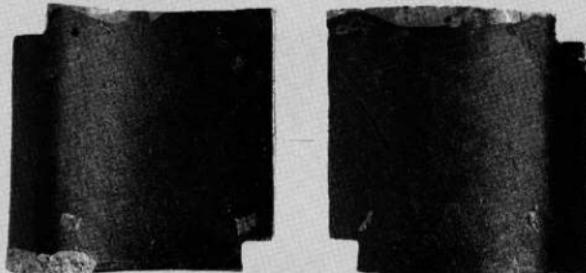
620

近代瓦 - 棱瓦

図版一五 遺物写真 矢田上町（1）地区



624



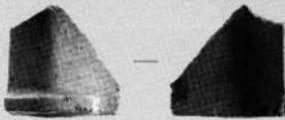
625



621 - 622



601

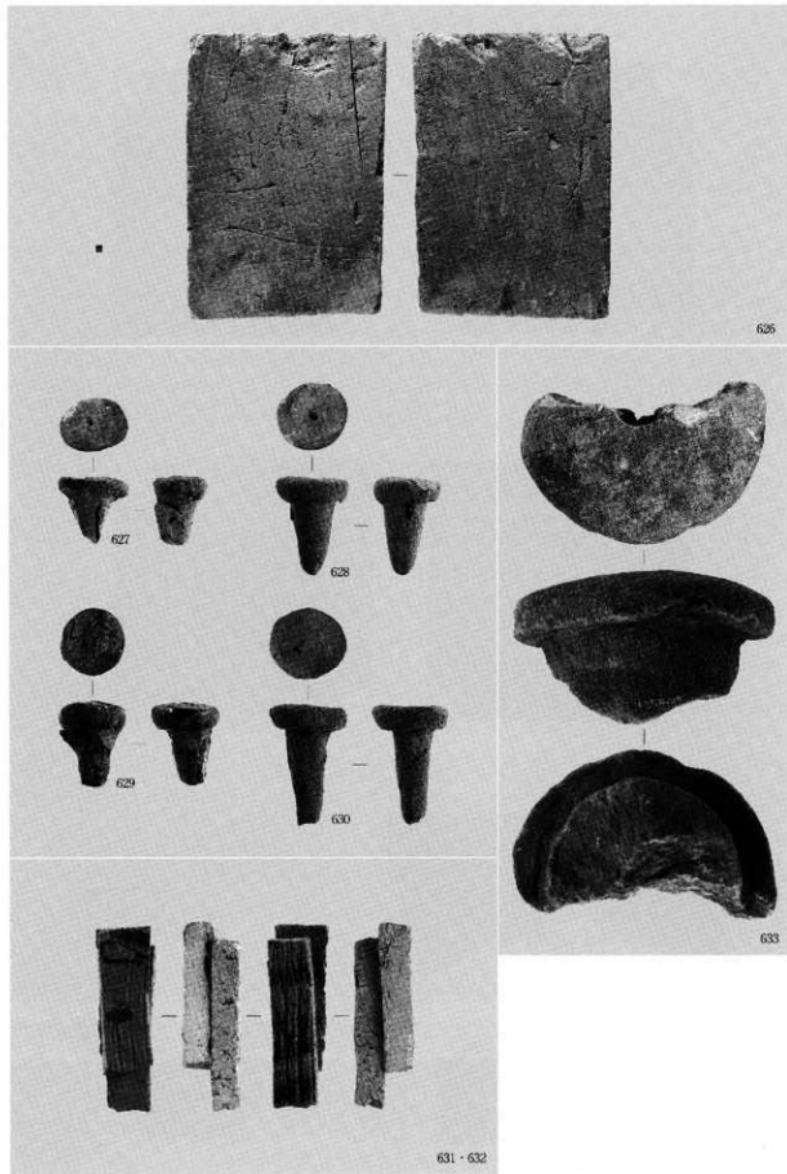


623



602

近代瓦－軒棧瓦、駒形雪止瓦



近代瓦・埠、窯道具

高岡市埋蔵文化財調査報告第21号

越中国府関連遺跡調査報告

発行者 高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路7番50号

2010年2月26日

印刷所 株式会社平田印刷株式会社

富山県高岡市野村1485番地

